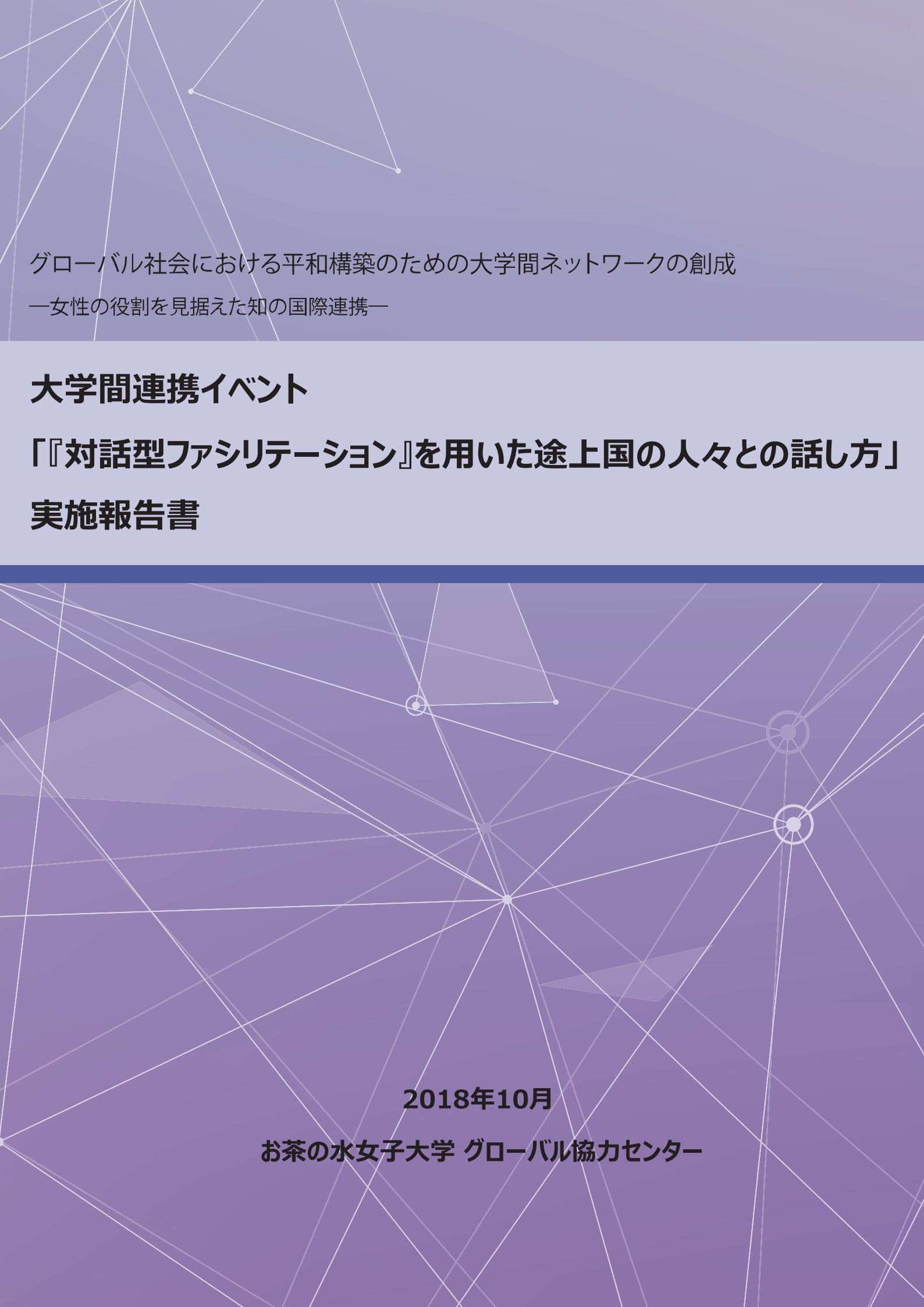




グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

大学間連携イベント

「『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方」 実施報告書

2018年10月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

はじめに

お茶の水女子大学グローバル協力センターでは、紛争終結国や開発途上国における平和構築、開発、及び、人間の安全保障に関する教育・研究・実践と人材育成を目的とする「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－」事業を平成 22 年度から実施しております。

本報告書は、この事業の一環として、平成 30 年 6 月 16 日に実施した大学間連携イベント『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方」の参加者の報告を取りまとめたものです。本イベントでは、NPO 法人ムラのミライ海外事業チーフの前川香子氏をお招きし、お茶の水女子大学をはじめ 3 大学 20 人の学生の参加を得て実施されました。参加者らは、国際協力の現場における課題発見・解決を促す実践的な手法である「対話型ファシリテーション」を参加型ワークショップ形式で学びました。

参加者と対等な目線に立ちワークショップをリードしてくださった講師の前川香子様、並びに、NPO 法人ムラのミライの皆様にお礼申し上げます。

また、積極的にワークショップに加わってくださった参加者の皆様に感謝申し上げますとともに、本イベントが参加者の皆様の将来の更なる学びへつながることを祈念いたします。

2018 年 10 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター
センター長 浜野 隆

目次

	ページ
1. 活動の概要	1
(1) 活動の目的	
(2) 実施日時	
(3) 実施場所	
(4) 講師	
(5) 参加者	
2. 参加者報告書	5
3. 講師報告書	45
4. 資料	49

1. 活動の概要

1. 活動の概要

(1) 活動の目的：

本大学間連携イベントは、「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」事業の一環として実施するもので、国際協力の現場における課題発見・解決を促す実践的な手法である「対話型ファシリテーション」を学び、現場に存在する根本的なニーズの把握や、その結果の外部者による援助のあり方への影響といったことを疑似体験し理解することを目的とする。国際協力の現場で、途上国の人々と協力者が対等な関係をつくり、当事者自身による課題発見、解決を促す実践的な手法について学ぶとともに、当事者主体の参加型開発について考える機会とする。将来的に、参加者各人の学習・研究・実践の様々な場面で応用できるようになることを目指す。

(2) 実施日時：2018年6月16日（土曜日）10:00～17:00

(3) 実施場所：お茶の水女子大学 本館 135号室

(4) 講師：特定非営利活動法人ムラのミライ

海外事業チーフ 前川 香子氏

(5) プログラム概要：

インド、ネパール、飛騨高山で地域資源を生かしたコミュニティづくりに取り組む認定NPO法人ムラのミライの前川香子氏（海外事業チーフ）による「対話型ファシリテーション」に関する講義や実践練習、グループワーク・発表などを通じその方法を理解し、体感する参加型ワークショップ形式であった。

「対話型ファシリテーション」とはシンプルな事実質問の組み立てを通して、相手の「真のニーズ」を掘り起し、気づきと行動変化を促すコミュニケーションの手法である。冒頭、前川氏より、南アジア地域での村落開発プロジェクトを形成する上での失敗談などを交えつつ、「対話型ファシリテーション」手法が生まれる経緯ときっかけについてお話があった。それまで、村人のニーズに沿ってプロジェクト企画を立案・実施していたつもりだったが、上手くいかないこともしばしばだったとのことであった。しかし、村人の感情や考え・認識ではなく事実について問う「事実質問」を積み重ねたところ、正確なニーズの把握が可能となり、そのプロセスを分析して「対話型ファシリテーション」手法が開発されたとのことであった。

本イベントでは、事実を聞き出すための技術について、使ってはいけない疑問詞、使っても良い疑問詞に関するレクチャーや、途上国における対等な人間関係作りの重要性、対

話の切り出し方などについて詳しい説明があった。その後、実践練習①として、ペアで「事実質問」の練習が行われた。

続いて、グループに分かれて、写真を1枚選び、その写真の中から知りたいテーマを設定し、その写真の場面から、30個を目指して質問を作り、どのように質問を組み立て、テーマの事実に応じてゆけるか考えてみるグループワークが行われた。グループでの討論の結果を発表し合い、参加者間の理解を深めた。

最後に、実践練習③として3人一組での練習が行われ、「対話型ファシリテーション」手法を用いてお互いの「改めたい習慣」について会話し、その人自身が改善策に気付くように手助けする訓練を行った。

(6) 参加者：

お茶の水女子大学 学部生 9人 大学院生 4人

奈良女子大学 学部生 5人

横浜国立大学 大学院生 2人

合計 20人 (参加申込者数合計 22人、うち当日欠席 2人)

(オブザーバー参加)

お茶の水女子大学グローバル協力センター 教職員 3人

原 智佐 (グローバル協力センター 副センター長)

青木 健太 (グローバル協力センター 特任講師)

駒田 千晶 (グローバル協力センター アカデミック・アシスタント)

2. 参加者報告書

小黒 歩実

横浜国立大学大学院 都市イノベーション学府 都市地域社会専攻

博士前期課程 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回の講義を通じて最も印象に残ったのは講義のテーマの一つでもある「事実質問」である。自分が実際にプロジェクトや調査のために現地でインタビューを行うとしたら、一番聞きたいことは現地の人々の考えや感情である。しかし講義を通して、考えや感情を直接聞くと相手はこちら側の意図を汲み取って回答をすることがあり、彼らの本当の考えというのは明らかにできないことがわかった。そこで、事実についてだけを質問していき、それに対する回答の中で相手の価値観や考えを明らかにしていくというのは私にとって新しい発想であった。

また、こちらが相手の考えを明らかにしていくだけでなく、相手自身も質問を通して「気づき」を得ていく。コミュニティや個人として何が問題で、何を必要としているのかを自分で気づくということは、そのコミュニティや個人が外部者とともに活動を行う上で非常に重要となる。近年、開発援助の現場で重要視されているのが住民の主体性であり、上記の住民自身の「気づき」というのは住民が活動で主体性を発揮させていくための重要なステップとなる。プロジェクトを通して解決しようとする課題や問題を自分事として捉えることができないと主体性を発揮させるのは困難であり、そのプロジェクトは住民のものではなく外部者のものになってしまう。たとえプロジェクトで井戸や学校を作ったとしても、そのプロジェクトが外部者のものであり続ける限り、外部者が去った後は住民がメンテナンスを行わずにそれらの井戸や学校は壊れたままになってしまうこともある。プロジェクトを行う前に住民が自分自身で「気づき」を得ることは、このような事態を避けることにもつながるだろう。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

実際にペアやグループになって「事実質問」を実践して感じたのはその難しさである。事実だけを質問していくことは簡単に思えるが、相手の回答にそって質問をしていくということは、質問者側は次の質問を考える際、頭の中で相手の回答と、自分の聞きたいことを事実を通してつなげていくという複雑な作業を行うことになる。これは前川先生も言っていた通り一定の経験が必要となることを実感した。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

今回の講義は開発における住民の主体性の重要性について改めて考える機会となった。上述の通り、プロジェクトの持続性において彼らの主体性は欠かせない。しかし、外部者

が介入を行うとプロジェクトの主導権を握るのは外部者となる可能性が高くなる。これは外部者が住民主体でプロジェクトを進めようと考えていても、住民側がプロジェクトの主導権は外部者にあると考え、プロジェクトがうまく進まなかったり、持続性がなかったりといったことがおこる。

講義で出た話の中で、メタファシリテーションを行う前のムラのミライはプロジェクトを行う際、住民にプロジェクトの参加の意思を確認した上で参加する意思のある者だけが参加するようなやり方をとっていた。きちんとプロジェクトの内容、住民に求められる活動などを説明してそれに同意した者だけが参加しているにもかかわらず、プロジェクトはうまくいかないことが多かったという。これは一見すると、参加をした住民には主体性があるように思えるが、彼らはまだその活動を自分事としては捉えていなく、外部者のものとして捉えていたのだと考えられる。しかしこのような事例はムラのミライの活動に限ったことではなく、開発の現場ではよくあることではないだろうか。講義にあったように、人間は考えたことと実際に行っていることに乖離があることがよくある。開発の現場でこの乖離をなくすには、住民がその活動が自分たちにとって本当に必要であると認識しなければならない。しかしそれは早急に、または、簡単にできることではない。ムラのミライも JICA のプロジェクトで住民の「気づき」を促し、彼らがプロジェクト内容の必要性を本当に理解していくまでのプロセスを半年以上かけて行っている。ムラのミライは事実質問から始めていき、住民が自分たちに必要なこととしてプロジェクトの内容と同じものを考えつくまでプロジェクトについては明かさなかったという。きちんと時間をかけて住民の「気づき」を促していったことでプロジェクトにおける住民の主体性が確保されている。また、事実質問を通してそのコミュニティに「あるもの」を住民と一緒に見つけていくことはそこに「ないもの/足りないもの」に注目しがちな外部者にとっても「気づき」を得る機会となる。

これらのことから、プロジェクトに入る前の準備段階が非常に重要であることが分かる。私自身、将来的に開発の現場に関わりたいと考えているため、これは心に留めておきたい。

今後の学習や研究に向けた抱負

今後、修士論文のための調査で途上国現地にてインタビューを行う予定があるため、今回学んだ事実質問を活用していきたいと考えている。これまでは、住民の考えや感情を直接聞くような質問を考えていたが、講義で得た知識を生かして質問項目を考え直していきたい。また、対話型ファシリテーションは「対話型」という言葉が入っている通り、対話形式で行うものであるが質問者側が自分の経験などを話しすぎると相手からの逆質問が多くなり、ただのおしゃべりになってしまう可能性がある。しかし相手が話しやすい雰囲気を作るためにも自分の経験を少し盛り込むことは有効であると思われるので、その匙加減も考えていきたい。

蒲田 凜

お茶の水女子大学 文教育学部 芸術表現行動学科舞踊教育学専攻 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

最も印象に残ったのは、事実を聞き出す質問では“Why?”と”How?”で聞いてはいけないということである。それこそ「なぜなんだろう」とはじめは疑問に思っていたが、確かに、過去に「なぜ～なんですか?」と問いかけられたときに、自分自身、曖昧でその場しのぎの答えをしてしまった経験があるため、本当の事実を探っていくためにはある意味推理的に、確実に事実を述べているところから聞き出していくことが重要なのだと理解できた。

また、そもそも「事実」とはどのようなことをいうのか、という視点は自分の中で新鮮で興味深いものだった。感情や考えの中にある答えとその人がすでに過去に経験したことでは、答えを考えるとときに想像するものが違い、考えの中の範囲内に収まるときにはどうしてもベストな答えを探してしまって、事実とかけ離れた答えを言うってしまう可能性があるということが印象的だった。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

当日は午後に予定が入っていたため、午前で早退してしまったのだが、メタファシリテーションの練習「これは何ですか?」のペアワークのみ参加した。この対話で気づかされたのは、「なぜ?」質問をしなくてもインタビューを進めていくことは可能であるということである。始める前は、難しそうな印象があったが、「なぜ?」と聞きそうになったときに別の質問に変えて聞き出そうとすることで、そのことについてより具体的に想像することができ、聞きながらさらにそのものについて詳しく知りたくなった。質問する側の時も質問される側の時も、だんだんと頭の中で曖昧だったことや特別記憶にとどめていたわけではないことを呼び戻すことができ、興味が湧いてくると同時に、自然と事実につながっていくという感覚は、とても不思議なもので非常に有効的だと実感できた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力と一口に言っても種類や形は様々で、その多くは、勉強がまだまだ足りない自分には到底できないことであるが、現地の人たちの本音や事実を知ることやそれに興味を示すことだったら、もしかしたら、開発や発展のことばかりを考えている大人よりもできるかもしれないと思った。現在も開発が必要で困窮している地域が多くあることは確かだが、本当に必要なことは、身勝手にお節介に開発を進めることではなく、本人たちの思っていることや本当に必要なことをわかった気にならずしっかり聞き出して叶えることであると考えた。自分も将来的には具体的な取り組みをして開発に協力したいとは思って

いるが、今の、大学生になったばかりの自分にしかできないこと、ピュアな心でしかできないことである「事実や本音をきく」ということを大事にしていきたいと感じた。

今後の学習や研究に向けた抱負

私は今年の8月にネパールにスタディツアーに行くので、そこに向けて、学んだことを生かしてインタビューや見学などを行いたいと思った。

この対話型ファシリテーションでの経験は、もちろん現地でも、英語で質問するような場面があったとしても必ず役に立つことであると思うので、現地の人たちの思いや事実を正確に聞き出して今後の学習にさらにつなげていきたいと考えている。

上山 友梨子

お茶の水女子大学 生活科学部 食物栄養学科 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

メタファシリテーションについての基礎から概念まで学んだ。メタファシリテーションとは事実を聞くための質問方法であるが、相手との間に誤解を招くような、「どう」、「なぜ」や頻度に関する言葉は使わないほうが良いということであった。これについては日常会話においても、気をつけるようになった。話すということは毎日何気なく行っていて簡単なことのような気がするが、家族や友人など周りの人との会話でさえ誤解が生まれていることがよくあるなど感じた。ましてや、違う国の初対面の人と話すときには、それぞれのバックグラウンドが違うため誤解が生じやすい。自分の世界でなく、相手の土台に合わせて話を進めていくというのも印象深かった。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

メタファシリテーションの実践練習が2回あったが、特に1つ目で初対面の人と事実質問だけで会話するのがとても難しいと感じた。なぜなら初対面だと話すのにも緊張をして、その雰囲気や和らげようと普通の会話に流れそうになるからだ。例えば、「高校時代、部活は何をしていましたか？」と相手に尋ねたときに、「バレーボール」と返答が返ってきた。私も中学校のときにバレー部に所属していたから、自分の体験話を少し始めてしまった。ここでの目的は「相手のことをよりよく知る」であったから、本来の目的から逸れそうになっていた。途上国において現状を把握することは、NGOなどの職員にとって、プロジェクトの始まりであり、重要な作業である。そこにおいて自分のことを話しすぎて、ただの会話になってしまえば、本来聞きたいことが聞き出せず終わってしまう。しかし、相手と

打ち解けなくては本音を話してもらえない。その加減が難しいと感じた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

援助する側に役に立っていると自負していてもそれが迷惑になっていたり、無意味であったりすることが実体験として聞くことができ、自分も何をどのようにすれば本当に意味のある活動になるのか今一度考えないといけないと思った。例えば、収入向上として農家に与えたヤギを食糧難で食べてしまうなど私たちが予測し得ないことが実際におこっている。その溝を埋めるために、現状把握が必要であり、そのときにメタファシリテーションが役に立つということであった。しかし、現状を何でもかんでも聞かれるのは当事者にとって、心地よいことでない。そのため時間をかけて、仲を深める必要がある。今まで色々な地域で将来活動したいと思っていたが、一つの地域に密着して、地元の人とも打ち解けて、本当にためになる活動をしたいと思った。

今後の学習や研究に向けた抱負

私は途上国の栄養問題について研究をする予定なので、実際に途上国の家庭を訪れて話を伺うこともあるかと思う。そのときに調査をする項目としては食習慣や健康に関する意識などだろう。そのときにメタファシリテーションを用いて事実を知れるようにしたい。また現地の人と打ち解けるために、積極的にマイノリティー言語も学びたい。

北田 恵莉佳

奈良女子大学 生活文化学部 生活文化学科 2年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

一番印象に残ったのは「いくらこちら側が支援しよう、対等に接することが出来るよう努力しようと思っても、途上国の人々は、先進国から来た援助関係者を見て劣等感を抱いてしまう。だからこそ、なにか共通の基盤を作って、彼らとの間にある壁を壊し、自尊心が上がるように働きかけることが大事。」とおっしゃっていたことだ。普通に暮らしていたところに、何かきれいな服を着て、知識豊富で、しっかりしていそうな人たちが入ってきたら、自分は服も家もボロボロだし、大して学校も行っていない、わたしなんて...と思ってしまう。外部の人間が入ってきて、比較対象が現れたからこそ、自分たちの状況をマイナスに捉えてしまう。スラムの子供たちだって、児童労働をさせられている子供たちだって、自分たちが俗にいうスラムに住んでいるという自覚はないし、児童労働は罪でよくない事、学校に行った方がいいとも思っていない、外部の人間が勝手に自分たちの思い込みで決め

つけ、勝手に「自分たちが助けてあげなければいけない存在」に仕立て上げてしまっているのではないか、国際協力において、パッションもすごく大事だけど、自分の気持ちが先行しすぎて盲目的になってしまっただけではよくないと感じた。だからこそ、「自分の思考の枠組みに相手をはめ込もうとするのではなく、相手の枠組みに自分をはめ込む、する寄せることが重要だ。」とおっしゃっていたのには、ものすごく納得した。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

どこかのグループが、一つの写真に着目して、この児童労働をさせられている女の子たちが学校に行きたいのかを聞くことを目的に、質問を組み立て発表した際に、講師の先生が「他の子は学校に通っているけど、あなたは学校に行きたい？こういう風に質問すると、学校に行った方がいいと言っているように遠回しに聞こえるのでよくない。そもそも児童労働は良くないのか、果たして子供は学校に行った方がいいのか、そこから考え直す必要がある。学校に行くべきか否かは私達ではなく、当事者たちが決める事である。」とおっしゃっていて、確かにと納得させられた。私はジェンダーをメインに学んでおり、基本的に、学科で学ぶことは批判的学問ばかりで、果たしてこれってこのままでいいのだろうか等、日々批判的(懐疑的)に物事を考える癖が自然と身につく学科だ。なので、入学当初は自分の大学での学びは国際協力とはかけ離れていると思っていたものの、何か通ずるものがあり、学科で身につけている途中の「思考の枠組み」は、どんなところにも応用できるなと確信した。

初めてメタファシリテーションの練習をしたのだが、思っていた以上に難しかった。どうしても自分の意見を言いそうになってしまったり、事実を聞くための質問内容を思いつけなかったりで、かなり困難極まりなかった。しかし、よりよい事実質問を組み立てるのも大事だが、それ以上に相手のことをもっと知りたい、相手ともっと話したいと思うことの方がより重要であり、途上国との話し方なんていう題がついているものの、結局は人と人との関わり合いで、この技法は国際協力の場面以外でも、日常の中で十分活用できるなと感じた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

「国際協力」なんていう名前がついているものの、結局は単なる人助けであり、横で困っている人がいれば助けるように、ものすごく自然なことだと思う。そのものすごく自然なことに対して、名前を付け、「国際協力」ってつくだけで、何か良いもの素晴らしいものであるかのように、私たちは仕立て上げてしまっているのではないかと思った。まったく異なるバックグラウンドを持った人同士が関わるからこそ、援助関係者は、自分たちの色眼鏡を薄くしなければ、良かれと思ってやったことも失敗に終わってしまうのだなと思わされた。自分独自の正義感をもって、自分の思考の枠組みの中で考えてしまうと、気づか

ないうちに相手を傷つけてしまうこともあり、それが自分とは大きく異なる環境で生きてきた相手だとより一層起こりがちになるのだと思った。また、「井戸ないね。井戸必要だね。材料は提供するから、完成したら自分たちで管理してね。」と言い残し、一年後再訪問すると、井戸が壊れているというありがちの話を聞いて、「確かに井戸がある方がいいのかもしれないが、壊れても生活できているということは、当人たちにとってそこまで必要なものではないのではないか。そもそもそのプロジェクトをやる必要はあったのだろうか。」と考えさせられた。

今後の学習や研究に向けた抱負

私が一番関心のある分野は、紛争解決や平和構築であり、実際に大学1年生の間はそういったNPOで活動し、渡航活動にも参加してきた。その活動の中で、「困っている人を助けたい」と思って何か活動をし、結局は自己満足で終わっているのではないかと。何かをGiveしたいと思っても、Takeさせてもらうばかりで何もできていないのではないかと。独りよがりになっていないだろうか。上から目線になっていないだろうか。結局自分は現地の状況を、彼らの気持ちを何もわかっていないのではないかと。そんな風に考える場面に多々遭遇し、「果たしてこれは意味のある活動なのだろうか。そもそも支援は必要なのだろうか。」と何回も悩んだ。しかし、悩んでいても何も進まないで、もがきながらもこのワークショップで得たことを生かして、より本質的な活動をしていけるように精進していく。また、前川講師は様々な経験を通して、メタファシリテーションの技法を確立されたようだが、結局は人間の内側の問題と深く関わっており、心理学的なアプローチでこのメタファシリテーションについてより深く学んでみるのもおもしろそうだった。

五屋 郁美

奈良女子大学 理学部 数物科学科 物理学コース 2年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

まず、「対話型ファシリテーション」という言葉の意味するところを勘違いしており、その意味とは対話を通して現地の人自身に問題に気づき、解決策を見つけさせることまでの気づきのサポートをすることであるということが非常に印象に残った。

次に、途上国の開発に関して、支援を主導的に行ったとしても持続的な社会の開発には完全につながらないことが衝撃であった。先進国の我々が考える問題点を解決することこそが、途上国の開発であると考えていたからである。しかし、前川さんの話を聞き、我々が問題だと思うことも現地の人にとっては当たり前なのかもしれない、そんな彼らの意識

を変えることは非常に困難なことであるし、本当に必要なことではないのだと気づかされた。問題を彼らが問題だと思っていない、それが本心ならば構わないと思う。しかし、本当はいやだが言い出せない立場の人々や、普段そのように思っていないが、思い返してみるとつらいと感じている人々がいるかもしれない、それを引き出すことが対話型ファシリテーションの意義だということを学んだ。

そして、対話型ファシリテーションにおける関係づくりの重要性である。無意識であっても、我々自身の立場は支援者であると意識するであろうし、ましてや途上国の人々にとってはなおさらに劣等感など上下関係を意識するであろう。そのような相手に本心を話せるかと言われれば、不可能である。そのことにも私は全く考えが及んでいなかった。活動を始めるにあたり、何よりもまず関係づくりをしていく必要があると気づかされた。

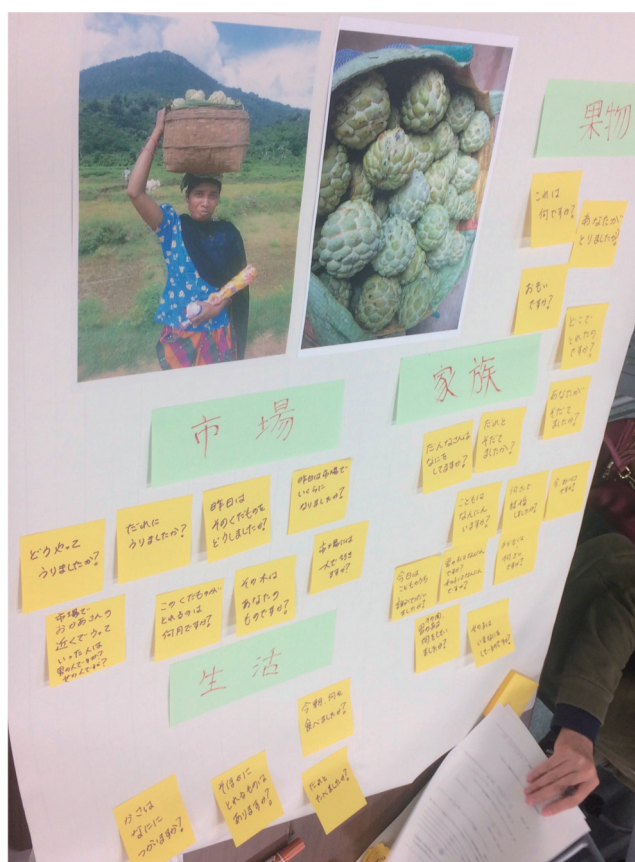
全体を通して、今回のセミナーにおいて自分にはなかった視点・考え方を知ることができたことは大変大きな収穫であったと思う。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

すべてのグループワークにおいて事実質問をおこなったが、なんと難しいことか。支援につながるような質問へと展開させていく以前に、質問が出てこない。前に立ってその例をスラスラ言う前川さんを見ていると、それほど難しいことではないように感じていたのだが、使ってはいけない疑問詞・副詞の制約に苦しめられた。やはり練習が必要であると感じた。

特に印象に残った2つのグループワークがある。

1つ目に、写真に写る人物にテーマを決めて質問をするというグループワークである。事実質問において時間を限定して質問することを実践できたのはよかったと思う。しかし、事実質問を通して、我々はジェンダーをテーマに掲げたのだが、それに関してどれほどの問題意識があるのか、考えの部分を聞き出したいのだが、どのように聞けばいいのか、どのように組み立てればいいのか、が非常に難しかった。その中で、写真のように質問を組み立て



(写真1) ジェンダーをテーマとした事実質問の組立

た（写真1）。この話し合いの中でも、どこからジェンダーを考えるのか、家庭や市場などメンバーの意見を聞くことで自分にはない新たな視点を知ることができ、自分の視野が広がったように感じた。

2 つ目に、改めたい習慣についての事実質問である。ここにおいても、私はなかなかどのように質問を組み立てればよいのか路頭に迷ってしまった。そのときオブザーバー役の方のアドバイスを聞き、気づかされたことがあった。それは、私は質問する際に答えをある程度自分で決めつけてしまっており、そのような答えを聞ける質問を探していた。それは、本来の事実質問の目的から外れてしまっている。様々な可能性を考え、事実を聞き出さなければいけないのである。そこで改めて、事実質問の難しさを感じた。

グループワークを通して、新たな考えや視点を知ることが出たのが何よりもよかったと思う。また、自分の考えの狭さを痛感した。前川さんのおっしゃるように、自分の枠にではなく、途上国の人の枠に自分をはめなければならない。より、柔軟な思考ができるようにならなければならないと思った。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力において、言語の壁、文化の壁、宗教の壁など様々な壁が存在し、それを乗り越えていくのは大変困難なことだと思うが、そもそもそれを意識しすぎるのが間違いのように思った。人と人、そのような意識でいなければならないと考えた。そして、それだけでなく、現地の人々にもそのように思ってもらわなければならない。

地域開発活動について、今回のセミナーを受ける前は、どこかおごりのようなものがあつたように思う。間違った使命感ともいえるそれは、先進国の価値観で途上国の現状を測ろうとしていた。しかし、持続可能な社会の開発において、何よりも大事なのは現地の人々の自主性である。その自主性を得るためには、現地の人々のモチベーション、危機感が必要である。それを進めるために、メタファシリテーションは大変有効な手段であると思った。

今後の学習や研究に向けた抱負

今回このセミナーに応募したのは、今季の一般教養の授業で国際協力の関するものを取りしており、興味を持ったからであつた。私の専門は物理であるので、他の参加者の方のように知識も経験もない中で、みなさんとの意見交流などを通して大変多くのことを学べたと思う。

東京から地元京都に帰った直後に地震が起き、私の家では食器が割れるという被害を受けた。誰もケガをしなかったので、良かったと安心してた。しかし、そのすぐ後に祖父の話聞く機会があり、とても考えさせられた。私の地元は京都府長岡京市で都会でもなく、過疎化が激しく進む田舎でもない。私の家の近くに住む祖父が言うには、自治会に参

加する世帯が減ってきているのだという。祖父は自治会の防災会長をしているのだが、定例会に参加できないことや、月 300 円の会費に見合う見返りが得られないことなどを理由に入会しないそうだ。しかし、今回のような地震が起こったとき、必ずしも家族がそばにいるわけではない。そのような時に助けあうのは地域住民ではないか。「遠くの親戚より近くの他人」祖父はそういった。そのとき、今回のセミナーを受けるにあたり、他の国の問題解決にばかりに目が行き、自国のもっと身近な問題に気付いていなかったのだと思った。

先ほど述べたように、私は現在途上国における開発を専門にしているわけでも、この道に進むことを決めたわけでもないが、セミナーを通して多くのことを学んだ。参加者の皆さんの熱意は心に刺さるものがあった。それと同時に日本国内の抱える問題を直接聞く機会もあり、大変な危機感を覚えた。これらの経験から、どのようなかかわり方をするかはまだ決めていないが、何らかの形で社会に貢献したいと強く思った。

最後にこのような貴重な機会を与えて頂いたことに前川さん、お茶の水女子大学の先生方、奈良女子大学の先生方、そして参加者の皆さんに感謝する。

権野 禎

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 人間発達科学専攻
教育学領域 博士後期課程 1年

本大学間連携イベント『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方に参加したのは、「主体的・対話的で深い学び」について、その実践と共に考えたかったからである。現行の学習指導要領と次の学習指導要領では「主体的・対話的で深い学びによって生きる力を育むこと」が目標とされている。小中高等学校の児童生徒は、習得・活用・探求という学習プロセスを主体的、対話的に行い、問題発見・解決をすることで教科等の本質的な学びが実現するという。それでは、学習プロセスで主体、対話、問題発見・解決はどのように行われるのだろうか。本イベントで得た知識と経験によってこれらの疑問に答えることを試みる。

最初に主体性について述べる。1990 年代の「魚をあげるのではなく魚の捕り方を教える」支援では、援助金の代わりに商品の育成(動物や果樹)や施設建設(井戸や学校)によって支援を行なった。しかし援助側の予期していたほどには被支援者の生活にあまり変化がなかった。これは金品が物品に替わっただけで、被支援者の受け身の姿勢を変えるものではなかったからだろう。作物が実らなかったとき「作物がうまく育たないのは雨が降らないため」と被支援者が言った例があった。支援を受けた人々が支援を有効に活用できなかったとき、その理由を自らの責任ではないところに求める。そのため支援の形を変えるだけで次から

次へと支援を求めることが続いていた。一方で成功体験は容易く人間の行動を変えることができる。試行錯誤の末に、ある結果が得られたとき、人間は達成感を感じる。そして、その結果が繰り返し得られるように努力する。このような努力の成果や達成感は、被支援者の自己肯定感や自尊心を育てる。自尊心のある被支援者は、問題解決を自己の努力目標とする。これが主体性である。

次に対話について述べる。支援者と被支援者の会話は、目に見えない上下関係が働き、被支援者は自らの意思や考えは後回しにして、支援者の意図や行為を慮ってしまう傾向にある。支援者は被支援者を、援助が必要な可哀想な人として見、被支援者は支援者を、援助を運ぶ寛容な人として見る、という例があった。このため支援者側の視点で不足していると思われる援助を行い、本当に地域が求めている援助についてはなおざりになってしまう。だから被支援者に本音を語ってもらうために、相手のことばの細部まで聞き取り、どのようなことばでも受け止め、相手の立場や考えを尊重した態度で接することが重要となる。言い換えれば、支援者と被支援者が互いの立場を超えて対等に話し合うのである。これが対話である。

最後に問題発見・解決について述べる。朝ご飯を問う実験で、質問形式によって回答が異なることが明らかとなった。嗜好を伴う質問では「感情」が答えとなり、頻度を伴う質問では「認識・考え」が答えとなり、事実を問う質問では「経験」が答えとなる。被支援者の実態や経験を知りたいときには事実を問う質問が相応しい。理由・原因・結果を答える「なぜ」「どう(して)」を避け、誰・いつ・どこ・何のように具体的な事柄を答える質問をすることによって被支援者の事実や経験を引き出すことができる。このような事実や経験の抽出の積み重ねが自己批判を生む。過去を振り返り問題を事実として正確に捉えることが、その解決方法を考えるきっかけとなる。これが問題発見・解決である。

これまでに述べたように、被支援者が主体性を備え、対話を重ねることによって、問題を発見し、解決へ導くことが可能となる。被支援者を児童生徒に置き換えた場合も同様のことが言えるだろう。児童生徒が学習の主体となり、教室で対話を重ね、自ら課題を発見し、その解決方法を探求する。こうした自らの力で培った学びによる問題解決は、児童生徒の自己肯定感や自尊心を育てる。したがって児童生徒は、主体的、対話的な学習プロセスによって問題発見・解決へと導くことができると考えられる。

児童生徒の生きる力の養成には課題が残る。その解決方法をムラのみライは示してくれた。それが本イベントのテーマであるファシリテーションである。教師は「教える」ことに慣れている。しかし「教える」ことでは、児童生徒の生きる力を養成することはできない。児童生徒の探求が熟し自己肯定感をもって未知の世界へ踏み出すようになるまで、時間をかけて児童生徒に向き合い、ソクラテス式問答を行うことがファシリテーションである。このファシリテーションによって児童生徒の生きる力を育むことができると考えられる。

酒井 麻佑子

お茶の水女子大学 文教育学部 言語文化学科グローバル文化学環 2年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

講義を受ける前は、なぜ対話によって途上国の支援が可能であるのか疑問であった。途上国への支援として真っ先に浮かび上がるのは、お金や物資の供給や学校、井戸といった設備の設営であったからだ。しかし、講義を通して、対話型ファシリテーションは持続可能な支援方法であることを学んだ。対話を通して、現地の人々に問題や問題の根源に気づかせ、解決方法を考えさせることによって、将来的に、支援から自立し自分たちの力で生活の向上をはかることができるようになる。一方、何かを与えるだけの支援では、問題の原因や解決方法の導き方が分からず、自分たちで何とかしようという発想はうまれてこないだろう。また、支援を受けることができるということに甘えて、暮らしに対し数々の不満を口にするとともに、支援を生かそうという意志が弱く、支援が無駄になることもあるようだ。

メタファシリテーションでは、相手が本音話しやすい雰囲気をつくることが大切であると分かった。途上国の人々が日本人に対して劣等感を抱き、無意識に目に見えない非対等な関係ができてしまうということも学んだ。劣等感がなくならなければ、相手は本音を話すことはできない。私自身も、自分より頭の良い人や仕事ができる人に対して劣等感や嫉妬を抱き、勉強や仕事に関する悩みを素直に打ち明けることができず、猫をかぶることが多い。そのようなとき、相手も同じような悩みを抱えていたり、共通の興味・関心をもっていたりすると、親近感が湧き、次第に劣等感が薄れていく。そして、もっと話をしてみたいという積極的な気持ちをもつことができる。途上国の人々と対話をする際にも、我々にとっての当たり前で相手の話を受けとめるのではなく、相手の枠組みの中に入っていくことによって、相手の自尊心を下げないように努めなければならない。

メタファシリテーションにおいて、How と Why の使用が禁止されていることが興味深かった。How は人の感情を聞き出すものであるため、その感情がうまれた背景は明らかにならない。考えていることと実際に行っていることが異なる場合もある。また、Why に対する回答には、良い結果であれば内部要因が、悪い結果であれば責任を放棄した外部要因が言い訳として含まれてしまう。事実とは異なる発言もあるであろう。例えば、課題が終わらない場合、実際は外出や趣味に没頭していたことによって時間をつくろうとしなかったという事実があるのにもかかわらず、忙しかったという言い訳をしてしまうことがある。メタファシリテーションでは事実を引き出さなければならない。前例の場合、事実を思い出ししていくことによって、自分の行動の何が悪かったのか、どこを改善すれば良かったのかが見えてきて、改善につながる。メタファシリテーションは途上国への支援だけではなく、私たち自身がもつ悩みや問題について考え解決策を導くための良い方法であるという

ことにも気づいた。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

事実質問をすることは、想像以上に難しかった。前川さんは普段の会話と何ら変わりがないような流れ、テンポで事実質問をなさっていた。そのため、事実質問はそこまで難しくないと安易に考えていた。しかし、実際にペアワークやグループワークをしていくなかで、事実質問は簡単にできるものではなく、練習の必要性を感じた。

ペアワークの一つは相手のことをひたすら聞き出すというものであった。事実を聞き出そうとすると、どうしても問い詰めているような状況になってしまい、硬い雰囲気となってしまった。前川さんのように、自然と対話型ファシリテーションを行うためには、対話型ファシリテーション用の質問をするための思考回路を頭の中で作る必要があると思った。また、私自身、どのように質問すればよいか分からず、しどろもどろになってしまった。対話しやすい心地よい雰囲気には程遠かった。How と Why を使わないよう心がけたが、一番使いたくなる疑問詞はその二つであった。How と Why で尋ねたいことを他の疑問詞に置き換えて少しずつ聞き出していくことは、頭を使い大変であったが、この質問の仕方こそが、事実に基づいた How と Why の回答を得るために最適であるということも実感した。相手の事実を聞き出していく中で、相手について沢山知ることができたような気がして嬉しかった。

グループワークでは、写真に写っている人に対し、あるテーマに基づいて事実質問をつくった。質問の数を増やすことが難しく、なかなか良い案が浮かばなかった。質問をつくっている最中は無意識であったが、指摘されて初めて、我々の基準で考えてしまっていたことに気づいた。基準にとらわれずに、質問をつくろうとすると、かなり質問内容が細かくなることも分かった。時間（時期）を限定して質問することによって、得られる回答も異なってくることも考えると、質問の量は絶えないのではないだろうか。テーマに沿った質問ということで、対話の最初から直球の質問が多かったように思う。実際は、親近感をもってもらうために導入の質問に気をつけなければいけないと思う。しかし、むやみに話題を広げて、本当に聞き出したいテーマから遠のいてしまうことも避けなければならない。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力や地域開発活動において、当面の問題を解決するために支援をするのではなく、長い目で見たときに、現地の人々自身が問題に対処できるように支援していくことが必要である。前者の方法であれば、緊急の問題には即急に対応できるかもしれない。しかし、他の問題に応用することができず、支援に依存することになる。一方、後者の方法であれば、時間はかかるであろうが、現地の人々の支援からの自立にはつながる。我々から供給しなければ成り立たない地域から、自分たちで生活しているが問題に関しては外部の団体

に依存している地域まで様々であろうが、それぞれの地域の実情に合わせて、支援方法も、供給型から、メタファシリテーション型にシフトしていく必要がある。供給型で支援が終わってしまわないように、支援団体同士のネットワークも必要なのではないだろうか。

今後の学習や研究に向けた抱負

私は、9月にグローバル協力センター主催のカンボジアスタディツアーに参加する。農村調査では、自分の研究テーマに基づいて現地の方々にインタビューを行う。はっきりとした事実を聞き出すことができるよう、事実質問の練習を行っていきたい。具体的には、自問自答を行う。数を重ねることで、忘れかけていた出来事を思い出せたかどうかを確認し、質問のパターンを見だし、どのように質問が分類されるのか調べ、最終的に事実質問用の思考回路をもちたい。

竹下 梨帆

お茶の水女子大学 文教育学部 人間社会科学科 3年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

途上国において相手の人に本音で話してもらうためには、関係づくりと対話の始め方が非常に大切であるという話がとても印象的だった。今までの人生、私は、家族、友人、自分のあまり知らない他者と話をする際、対話の始め方について意識をしたことはなかったし、会話をする際に関係性においても特に意識することはなかったからだ。途上国の人は、私たち（外国人）を見て、“私たちより服がきれい” “お金を持っているんだろうな” “外国語を話せるんだな” と感じることで、自分たちに劣等感を感じてしまうということを聞いた。もしも対話をする際に、彼らに劣等感を抱かせてしまったら、確かに本音話してくれるわけがない。途上国の人から事実や本音を聞き出すためには、対等な関係であるということを相手に認識させ、自分の枠組みではなく、相手の枠組みに自分が入っていくことを意識しなければならないと感じた。また、講義ではその対話の始め方として、相手の身につけているものや興味を持ったものに“これは何ですか？”と質問することが有効的であると学んだ。そして、そこで更に大切なのが事実質問だけをしていくことである。質問には、感情を聞く質問、考えや認識を聞く質問、そして事実を聞く質問の3種類がある。前者二つの種類の質問は相手に答えを考えさせてしまい、答えてくれる可能性が低いまたは本音話してくれない可能性がある。事実質問は、過去に起きたことを思い出せばいいだけなので、本当にあった事実だけを話してくれる。事実質問を彼らに繰り返ししていくことで、彼らが自分から話していつてくれるようになるということを聞き、事実質問とは

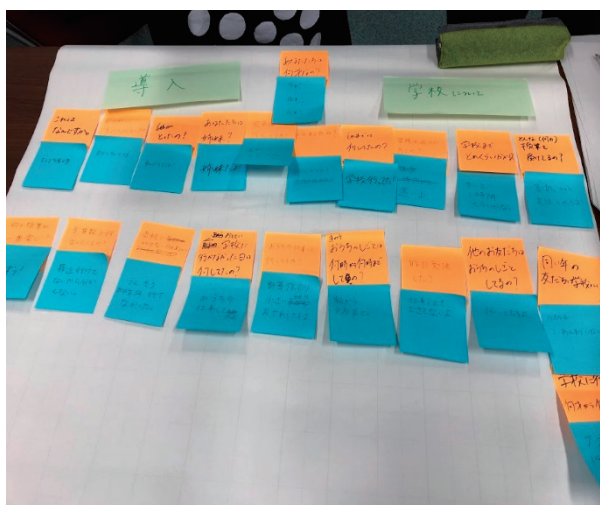
エンジンのようなものであり、彼らの心を開くために必要な手段だと感じた。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

私たちのグループは、三人の子どもが映っている写真を選び、「学校と家庭の両立の現実」について最終的に調査するというテーマを持ち、それに導く 30 個の質問内容を考えた。実際に事実質問だけを作り、そのテーマに導くことはかなり難しく、単純なことなのに、そのテーマについて聞き出すには、聞き出す側の思考力がとても必要だと感じた。“なぜ”や“どう”という疑問詞を一切使わずに、子どもたちの感情を聞き出す質問を作るのは、慣れていない私たちにとってはかなり考えさせられた。また、「学校に行きたいと思いますか？」という質問に対して、先生がこれは、誘導質問になってしまうし、“あー、学校に行かずに働くことって駄目なのかな”と感じてしまう人もいると言っていた。そこで、この場合は「学校には行ったことある？」「学校の話聞いたことはある？」と質問し、この人がどんな行動をしてきたかで、学校に通いたさが分かると言っていたのを聞いて、自分の欲しい答えを聞くためには回り道が必要で、分かりやすい質問をし続け、その答えから相手の感情や思考を汲み取ることが大切なのだなと感じた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

スタディツアーの事前学習の際に、先生から発展途上国の人々に「本当に必要とされているものは何か」を知ることの大切さを伺っていたのだが、それを解明するために必要なのが前述したメタファシリテーションであるということを知り、また一歩国際協力の理解につながった。テレビ番組などで見ると支援活動やボランティア活動は、メタファシリテーションを活用できていないのではないかという疑念が強まったので、その界限にも『ムラのミライ』がとっているような方法が広まってほしいと思う。たとえ視聴者の存在を意識したバラエティ色が強いものであったとしても、せっかくお金や人材を動かし現地の人々の時間もいただいているわけであるから、やるからには的確な手段をとってもらいたい。そして、そのほかの NPO 法人のような団体の中にももしかすると、まだメタファシリテーションという概念がない団体が存在しているかもしれないので、そちらにも浸透することを願う。さらに私はこの講習に応募する際、「相手が発展途上国の人だということを意識しすぎずに話を伺いたい一方で、自分の関心において学習する



写真：私たちのグループの質問内容

姿勢も忘れずに接していきたい」と述べ、そのさじ加減が知りたいと記述した。前川さんからは、相手がこちらの満足する答えを言っているかもしれないことを頭に入れておき、「日本から来た＝何か支援をしてくれる」という期待を崩したところから始めるというスタンスでの挑み方を教わることができた。これは9月のスタディツアーで役に立つものであり、またこれから先、仕事として国際協力や地域開発に携わる時になっても覚えておきたいことである。今回の講習で貴重な話を伺った身として、自分でも国際協力のあり方に影響を与えられるようになればと思う。

今後の学習や研究に向けた抱負

私は、恥ずかしながら、今まで国際開発や地域開発活動について一度も学んだことや考えたことがなかった。そのため、基本的な知識もなく、このセミナーで初めて国際開発について学んだ。私は今まで、途上国を援助するためには国際的に協力をして、物資支援や教育支援をすることが重要だと思っていた。しかし今日のセミナーでムラのミライの失敗談を聞いて、物資支援をするのではなく彼ら自身が自立するための方法や手段を伝授することが、今後途上国が成長していくうえで必要なのだと思った。もちろん募金活動や物品の寄付などを先進諸国が行っていく必要もあるが、どうしたら豊かな暮らしができるようになるのか、どうしたら経済発展できるのかということを現地の人と共に考え、それに応じた知識や技術を伝授していくことが、平和で安定な国が増えていく一歩になるのではないかと思った。

今後の学習や研究に向けた抱負

私は、今年の夏にカンボジアの農村に調査に行く。このセミナーで学んだ対話法を生かし、現地の人と会話をし、少しでも彼らから本音を聞き出して調査ができればいいなと思っている。このセミナーが私にとって、途上国について学ぶ最初の授業だったので、これから自分でインターネットや書籍を通じ、もっと国際開発について勉強し知識を蓄えていきたいと思った。

立石 琴美

奈良女子大学 文学部 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

私が講義を受ける前に思い描いていた国際協力とは現地の人が必要としているものを彼らの口から聞き出して、それを与えるというものだった。何を必要としているのかは彼らの認識を経て彼らから聞き出すものだと考えていた。しかし講義の冒頭で、90年代のムラのミライの失敗談を聞いて、自分が思い描いていた国際協力では自立という目標を達成できないかもしれないと思った。物資や知識を与えるだけでは国際協力としての効果が出せないのではないかとこの講義を通じて考えた。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

この講義ではメタファシリテーションや事実質問について説明を受けた後、メタファシリテーションの練習を三回行った。説明を聞いたときは事実質問が相手の認識ではなく、事実だけを聞いていくものであるということは理解できた。しかし、ペアワークやグループワークで実践してみると、何が事実で何が認識なのかが話せば話すほど分からなくなってしまったり、どんな質問をするか考え込んでしまうことが多かった。そのため、スムーズに会話が续かなくなってしまう場面もあった。実際に現地の人とお話するときこのようになってしまったら相手の人に本音で話してもらうことは難しくなるだろうと考えた。考え込んでしまった原因として、相手が何を必要としているかを自分で判断し、それを無意識のうちに相手の口から聞き出そうとしてしまったことが考えられる。相手が何を必要としているのかを判断するのは相手自身だという認識が不足していた。そのためより多くの練習を重ねてこの認識を改善していくことが、相手に事実質問を投げかけるために必要だと考える。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

これまで国際協力や地域開発活動について、問題を解決するためにはあらかじめ一つの答えが用意されていると考えていた。しかしグループワークのあとの生徒の質問に対する講師の方が「学校に行くべきかどうかということも私たちが判断してはいけない。学校に行っても子どもにとって適切な教育が受けられるとは限らない。」と、おっしゃった。私は全ての子どもが学校に行くべきだと考えていたため、この発言に大変驚いた。正解や解決法は全ての人に共通する答えがあるのではなく、その場その場で答えは様々で、当事者が認識している解決法と事実に基づく解決法がずれることがあるということを学んだ。これを認識において、決して自分の先入観を持たずに相手と接することが国際協力では必要不可欠であると考えた。

また、やはり現地の人が必要としている支援を行うには現地に行って直接話を聞く必要があると改めて感じた。現地に行くことなしに議論を重ねて問題が発覚したとしても、それが本当に自立を妨げているものなのかどうかは分からないだけでなく、その問題を現地の人自分が自身で認識し得ない限りは同じ問題を繰り返すことになってしまうのだと感じた。

今後の学習や研究に向けた抱負

今回の講義を通じて認識の危うさを強く感じた。これは国際協力において重要なことであるが、日々の学習や研究においても重要なことである。自分が抱えた課題に対して、自分自身に事実質問を重ねることで自分の間違えているかもしれない認識を通すこと無く、適切な解決法を導き出すことができる。この方法を積極的に用いて、学習に取り組みたい。

内藤 百合子

お茶の水女子大学 文教育学部 人間社会科学科 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

当事者の置かれている状況や、当事者の周囲で発生している問題に、当事者自身に気づいてもらえるような支援をすることの重要性を学んだ。問題解決のために本当に必要なことは、現状把握をし、そこから問題の根源を見つけ、解決方法を探るというプロセスを当事者にできるようになってもらうことで、そのために必要な支援の中心にあるのが事実質問であると学んだ。

また、途上国の人と話すことを想定したときに、自分の立場に引き寄せて考えることができていなかったことにも気づいた。本来の対話は双方向的なものであるが、調査や支援という目的を持った先進国の「支援者」と現地の人との間には見えない上下関係ができてしまうことを改めて学んだ。開発援助を考える際に、相手の自尊心の向上についてまで思いを巡らせることができていなかったと思った。相手を尊重しているということを、相手にもきちんと伝えられる点でもメタファシリテーションの有効性を感じた。

セミナーの中では前川先生が実際に経験されたことも多くお話していただいたが、その中でもインドのスリカラム県の流域管理事業のお話が印象に残っている。NPO 職員はすでに問題点を把握し、事業プランも持った上で村に入っているが、自分たちからは一切提案をせず、地元の人に質問を重ねることで気づいてもらうという形で、3年間かけてプロジェクトを成功させたという。この3年という数字を聞いたときにはとても長いと感じ、驚いた。答えにたどり着いてもらうことを急かさず、自分たちも焦らずに、村の人の気づ

きにつながる質問を重ねることの重要性を感じると同時に、非常に長い時間がかかるということも分かった。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

個人、グループ合わせて3回メタファシリテーションを実践する機会があったが、1回目では非常に難しいと感じた。事実質問は過去に起こった事実を引き出すことを目指しているが、自分は未来のことをたくさん聞きそうになってしまった。将来のことを聞けないのは支援の中でも問題となることがあるのではないかと思ったが、その疑問は練習終了後の先生からのお話を聞いて解消された。将来の目標が生じる背景には、その目標と反対の「今」があるということなのだ。その「今」起こっている事実を正確に知ることから、当事者と質問者双方で共に問題点を見つけることができ、解決へと繋げていけるのだと学んだ。

また、「これは何ですか。」という質問から始めることの重要性もとても印象に残っている。相手はどんなことを聞かれるかと恐れを持っているが、相手の持ち物などに対する「これは何ですか。」という質問なら答えることができるし、こちら側が興味を持って受け止めているということが相手に伝わることで、相手の自尊心低下も防ぐことができるのだ。そこから相手との信頼関係が生まれ、だんだんと自分の知りたいことも聞いていくことができる。自分が相手のことを新たに知ると同時に、こちらの質問によって相手自身も、気づいていなかったことに新たに気づくという形で、共通の土台ができるという言葉もとても印象的だった。

2回目にあたるグループワークでは、自分たちの考える質問がいかに自分たちの基準や価値観に基づいてしまっているのかということを感じた。仮説を立てたり、知りたいことを明確にしたりすることは重要だが、それに沿った答えを求めてしまっていたと気づいた。そのようにして生まれた質問では、相手もこちらの求めている答えを返そうとしてしまい、事実や本音を聞き出すことが難しくなってしまうと学んだ。

相手の思いや考えなどを知りたいときでも、それらについて単純に問うのではなく、その思いを持つきっかけになった出来事が何かを聞くことで現状をつかむことができるのだと分かった。「なぜ」という言葉を使わずに質問するのはとても難しかったが、それ以外の言葉で質問を重ねることで、「なぜ」と聞いたときに得られる答えよりも、主観が少なく調査に有効な「事実」を答えとして得られるのだと分かった。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

スリカラム県の事例などを聞く中で、自分がこれまで考察してきた開発支援は、早く成果を出すことを求めていたのではないかと気づいた。参加型開発の重要性は認識していたつもりだったが、自分の視点には自分の立場や主観が大きく影響していることを改めて

学んだ。当事者主体の開発、問題解決の成功には長い時間がかかるということも分かった。また以前から、現地の人は本当に「開発」を望んでいるのだろうかという漠然とした疑問を持っていたが、それは自分が想定していた開発の根底にある考えがトップダウン式のものであったからだと分かった。支援に関して選択をするのは当事者であり、メタファシリテーションを使った開発であれば、それがきちんと実行できると思った。

今後の学習や研究に向けた抱負

問題解決において対話が大きな力を持っているのではないかという考えは以前から持っていたが、具体的な使い方、対話の仕方については考えていなかったことに気づいた。今回のセミナーを通して、対話の使い方として非常に有効なものを学ぶことができた。今後対話を軸に国際協力について考えていきたいと思っているので、その際にメタファシリテーションについても考察を深めたいと思った。また、様々なプロジェクトを行う上でコミュニケーションの取り方についても考察してみたい。

同時に、自分の生活の中での問題解決に際してもこの方法は重要だと思った。課題や学習の中での問題に対して、客観的に自問を繰り返すことで事実が明確になり、考えも整理されると思うので、実行したいと思う。

平井 里佳

お茶の水女子大学 文教育学部 言語文化学科 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

私がこの対話型ファシリテーションについての講義から学んだことは、国際支援をするにあたって相手を受容することの大切さである。前川さんのお話にもあったが、私が国際協力についての本を読む限り、あまり望ましくはないが、途上国の人々がこちらから送った支援物資を当初計画していたようには使ってくれなかった、ということはよくあることだ。そこでつい私たちは、相手を責めたくなくなってしまうだろう。しかし、前川さんら、ムラのミライのみなさんは、対話型ファシリテーションによって解決策を見出した。対話型で質問をすることにより、私たち質問する側は、相手のことを通常の質問体型よりも容易に知ることができる。相手も質問に答えやすい。相手の声を引き出し、親身に耳を傾けることによって途上国の人々とより親密な関係を築くことができる。そうすることによって支援する側からのワンウェイな支援にはならず、言葉のキャッチボールを通じて構築される、需要と供給に合った支援が行われるのだろうと思った。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

実際に対話型ファシリテーションを意識して質問を行ってみると、いかに自分のこれまでの質問が抽象的であり、答える側に優しくないのであったかが実感できた。YES/NO で答えられる質問をされると、回答者は即座に答えることができる。そうすることによって会話のテンポがうまれ、次第に回答者は YES/NO に加えて自分について、地域についてといった情報を話したくなる。質問する側は正直、対話型ファシリテーションを用いて質問することは難しく、「どう思いますか?」、「どうしているのですか?」と抽象的に尋ねた方が楽だ。しかし、それでは回答者ははるかに答えにくくなる。毎日、自分がなぜその行為をしているかをひとつひとつ考えている人は少ない。だからこそ、そこは質問する側が配慮し、「さあ、教えてください。」と投げ出すのではなく、まるで引出しをひとつずつ開けていくように、回答者の思考をほぐしてあげることが大切なのだ。そのためには、日々の生活においてまずは自分の中で“対話”していくことが必要だと思う。なぜ、と尋ねる癖をやめて、小さなところから解決のヒントを得る。その習慣を身に付けたいと思った。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

前川さんのお話の中で、「途上国の人々は潜在的に私たちに対して劣等感を抱いている。」ということがあった。また、「支援されていることに慣れていて、支援してもらうための答えを言うようになってしまっている。」ということもおっしゃっていた。この現状を打開しなければ、国際協力・支援は結局意味を成さないと思った。支援をする人々の国と、途上国の環境は大きく異なることが多い。また、支援する側が永遠に支援対象国にいても難しい。その上で大切なことは、支援されることに慣れている人々の自立である。しかし、そこで支援する側にとって大切なことは、上から目線の支援にならないことだ。例えば、教育面についていえば、私たち日本人にとって子どもは学校に行くことが幸せのように思えてしまう。しかし、それが必ずしも幸せとは限らない。現地の人々に寄り添うこと、それが一番大切なのだと私は思った。

本田 歩

お茶の水女子大学 文教育学部 人間社会科学科グローバル文化学環 3年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

講義を通じて、途上国の支援対象地域に「自立」してもらうことの意義を学ぶことができた。まず、1990年代にムラノミライが行った支援の失敗談について事例を挙げた後に、対話型ファシリテーションを用いて行うようにした支援とその成果について説明してくだ

さったおかげで、容易に比較ができ、両者の対称的な違いを理解することができた。前者においては、外部者が村に何が必要なのか考えて、外部者がプロジェクトを先導するという外部の支援者ありきの支援であった。そのため、村民は受け身となったばかりか、プロジェクトの遂行に高いモチベーションを持てずにいたため、表面上では「プロジェクトを成功させる」と言っておきながらも、行動が伴わずにいた。そのため、プロジェクトは失敗に終わってしまう。その一方で、後者においては、支援者がプロジェクトの必要性和具体的な計画を決めるのではなく、かといって村民と議論をしながらプロジェクトを決めるのではなく、支援者は、意見も提案もせずただ事実を尋ねる質問に徹し、村民自らの気づきと思考を徹底的に優先させる。その結果、村民は外部からの知識や資金やマネジメントへの依存から脱し、主体性を持ち、プロジェクトに責任を持ってコミットするようになった。後者の方法は、プロジェクトが失敗する可能性を下げるだけでなく、村人たちの自尊心を高めるという効果を持つ。なぜなら、自分たちで考え、主体的に行動した結果、村が良くなるという成功体験を積むことができるからである。

さらに、対話型コミュニケーションにおいては、先進国など裕福なアウトサイダーと村人が向き合う際に生まれがちな劣等意識や権力関係に細かく注意が払われている。例えば、「何気ない身近なことから話を始めること(所有物等についてそれはなにかと尋ねる)」「答えやすいことを尋ねること」、「ネガティブなことではなくポジティブなことを想起させるようにすること」などといったことが重要視されている。これらに留意することで、途上国の村人の自尊心を高め、エンカレッジすることができるのである。実は、この技法とその基になっている考え方は私にとって大変示唆的であった。なぜなら、途上国でストリートチルドレンを支援するボランティアをしていた際に、いかに彼らと対等で心地の良い関係が築くかということに私自身課題を感じていたからである。対話型コミュニケーションは、途上国で現地の人と対話やインタビューをする際に非常に役立つと感じた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

今回のイベントでは、ペアワークやグループワークも積極的に行われ、対話型コミュニケーションの実践的な練習が行うことができた。配られた写真の中に写る途上国の住人に、一つのテーマを決めて対話型コミュニケーションを行って、そのテーマについて尋ねるというワークショップにおいては、対話型コミュニケーションの難しさを感じた。それと同時に、グループ内での議論が活発になり、どのような質問なら対話型コミュニケーションの枠内におさまるか等活発に意見が重ねられるようになるうちに、対話型コミュニケーションへの理解が深まっていった。定められた時間内に、課題であった、決めたテーマについて深く聞けるような30の質問を考えることはできなかったが、その点は大きな収穫であった。また、講師の前川さんが参加者から質問を募るなど積極的にコミュニケーションをとってくださったことも、対話型コミュニケーションの理解を深めることに大変助かつ

た。「対話型コミュニケーションと尋問の違い」や「トップダウン型の組織で時間的制約がある場合には対話型コミュニケーションはどう機能するか」といった疑問について、詳しくお答えいただき、対話型コミュニケーションの奥深さと利点について再確認することができた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

今回のイベントを通じて、国際協力や地域開発における外部の支援者の役割についてあらためて考えることができた。国際協力の歴史を振り返れば、国際銀行や国際開発機関などからの押し付けの要素が強かった時代から、住民が主体となって彼らが内発的に開発を進めていくことや、住民が参加して進めていくことが重要視されるようになり、内発的發展や参加型開発へと舵がきられていった。私は、このような潮流の中で、外部の支援者の役割について、農村開発に関する情報やノウハウがあるアウトサイダーはいかに現地の人を主体としながら開発を進めていくべきなのかという視点から今まで自分なりに思考してきた。だが、この視点、思考の枠組みについて、対話型コミュニケーションを学んだことで、再考するようになった。なぜなら、この私の思考の枠組みは「ノウハウがある外部者は専門家としてそれを生かすべきである」という考えをベースにしているように思ったからである。奥が非常に深い対話型コミュニケーションの神髄を完全に理解しきれたとは思わないが、私は、対話型コミュニケーションを行う外部者は、専門家といった態度や行動はせず、つまり、口出しをせずに、真のアウトサイダーとして巧妙に住民と距離をとることが必要なのだろうと思う。その点で、私の従来の考え方のパラダイムを転換させてくれたこのイベントは大変有意義であった。

松本 ののか

お茶の水女子大学 生活科学部 人間生活学科 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

朝ごはんは何を食べるのが好きですか？普段朝ごはんは何を食べますか？今朝朝ごはんは何を食べましたか？この三つの質問を、今までは同じことを聞いているものだとばかり認識していた。しかし、答えは必ずしも一致しないことに気づかされた。初めの質問で聞いているのは感情であり、次が考えや認識、最後が事実である。現実はこの三つの要素によって構成されている。認識を尋ねても、その答えには思い込みや聞き手への忖度が入ってしまう。リアルな実態が知りたいときには、変わることもない事実を聞くべきだと学んだ。

「いつもは」「ふだんは」といった言葉は便利で、相手のことを大づかみに手っ取り早く知ること

ができるような気がしてしまう。しかし、そこから本当の実際を知ることはできないということがわかった。「なぜ」「どう」といった言葉も同様である。つい尋ねがちな質問の仕方だが、自分が「なぜ」「どう」と聞かれたときのことを考えると、確かに答えは自分の中でも不明瞭で、場の雰囲気流されたり、その時々で適当なことを答えてしまいやすいと感じられた。このことは、開発途上国での調査に限らず、例えば日本人同士で話し合いをするようなときにも気をつけなければならないと思った。

また、家族や収入といった話題を初対面でいきなりすることは失礼だという話が印象に残った。知らない人にプライベートなことを聞かれて戸惑ってしまうのは、インタビューという名目であっても変わらないのだと改めて感じた。初めて会う相手について知りたいことがあるとき、直接すぐにそれを聞き出そうとしてしまいがちである。まして、相手が違う文化を持った外国人であると、気が回らずつい配慮が足りなくなってしまうそうだった。相手が話しやすいように配慮すること、本音を話してくれるような関係を作ることの大切さを学んだ。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

「なぜ」「どう」といった言葉を使わない事実質問だけを用いる練習では、いかにそのような質問を自分が使いがちかに気づかされた。また、実際に質問をしようとしてもうまく話を繋げられず、インタビューの難しさを感じた。相手のことを考え本音を言えるように配慮しながら、自分の聞きたいことを会話の流れの中で聞き出すためには、訓練や慣れが必要なのだろうかと感じた。さらに、相手が自分の質問を分かりにくいと感じていたり、不快に思っていないだろうかということが気にかかった。相手が外国人であればなおさら、文化や常識の違いから、すれ違いが生まれてしまいやすいのではないかと考えた。

「これは何ですか？」という質問から始めることで、相手との間の壁を無くしていくという話が印象に残った。たしかに、いきなり難しい質問をされるより、自分の持ち物のことなら説明するのも容易だと、グループワークで質問をされる側になったときに感じた。また、その際に、自分の答えが相手の期待に沿っているか、こんなことを答えてどう思われるだろうかということを、自分自身も、質問に答えるときに気にしてしまいがちであることに気づいた。相手のどんなことにでも、自分は興味があるということが、きちんと伝わるようにすることを忘れないようにしたいと感じた。

改めたい習慣の改善策を、事実質問を通して相手自身に気づかせるという練習では、つい相手に自分の意見を押し付けてしまいそうになった。相手も自分も問題点を理解していないままに改善策を論じるのは危険だと感じた。質問をしていく中で、相手がこちら想定していなかったような新しい視点を得たり、解決のための行動を思いついたりするのをみて、質問をされることで自分の中でも自身の問題に対する理解を深められることに感慨を持った。

質問をするとき、こちらから答えを決めつけたり、誘導するようなことを、思っていたよりも無意識に行いがちだと気づいた。こちら側からの常識や偏見を排除した質問をすることの難しさを感じた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

「ムラのミライ」の、これまでの失敗談にまず驚いた。これまで、援助というものはやれば必ず事態をよくできるもので、開発途上国と呼ばれる国々はその援助が受けられればいずれは自立ができるものと思っていた。しかし、そう単純にうまくいくものではないことがわかり、衝撃を受けた。NGO の団体がやっていることは、途上国において必ず役に立っているに違いないと思い込んでいた自分の浅はかさを感じた。開発支援とは、ただ与えれば終わりになるものではなく、これをすれば必ず良くなるといったような図式に当てはめることはできないのだと改めて思った。支援する相手も、その環境で生きている人間であるということを、私はこれまであまり意識していなかった。どちらかといえば、国際協力を、書面の上で行われるような無機質なもの、あるいは、個々人とは直接には関係のない大きなものとして捉えていたのかもしれない。主体は援助をする側だけではなく、受ける側、自立しようとする人々の側にあるのだということを感じた。

自立には、たしかにゴールが見えない。ただむやみに与えているばかりでは、問題は解決しない。人々と向き合い、行動を促さねば、現状は本質的に変わることができないのだということを学んだ。どのような形で行われた援助が成功とされているのか、その後も状況は良くなり続けているのかどうかを調べてみたい。

丸竹 美保

横浜国立大学大学院 国際社会科学府 国際経済法学専攻 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

これまで国際協力について、援助国である日本と、被援助国との政策対話における日本の方針は被援助国の「オーナーシップ」を尊重することであるということを耳にしており、ここでの「オーナーシップ」とは、援助を受ける側、つまり途上国の方々に対して、援助を提供する側が必要だと考えることを押し付けるのではなく、問題に直面している本人が主役となって解決策を導き出すことであり、援助側はその手伝いをする役割を担っていると認識していた。しかし、その手伝いとは、具体的にどのような方法が、途上国の方々が問題の根源を把握し、それに対する解決策を導き出して行くのに有効的なのかということころまでは理解していなかった上に、その方法を教えていただけるような機会に出会うこともなかった。このような経緯を踏まえ、今回の講義は非常に上記の理解の助けになった上に、実践としてグループワークでその難しさを体感することができた。

とりわけ強く印象に残ったことは、途上国の方との話し合いの場で、その話し合いの主導権を、援助を提供する側が持つのではなく、主に途上国の方々のみで進めてもらい、援助側の役割は、「事実質問」を繰り返し行うことのみであるということである。相手の感情

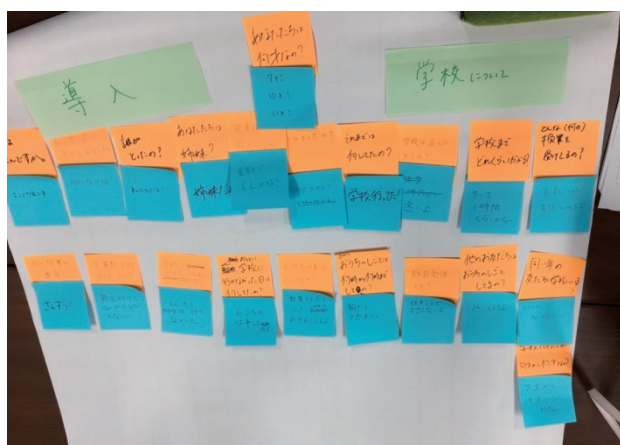
も考え方も関係なく、事実のみを聞き出していく事で、根本的な問題を途上国の方自身に気づかせることができるということは、私にとって新しい学びだった。

また、途上国側からすると、先進国から来た人に対して無意識に劣等感を感じてしまうということに加え、そもそも見ず知らずの人に個人的な問題、情報を提供するという事に対する警戒心も生まれるであろうということを前提に、自分の本当に知りたいことをダイレクトに聞くのではなく、相手が答えやすいような環境、空気づくりを、質問を通して工夫していかなければならないことも、当然なことではあるが、忘れやすい重要なポイントでもある。その重要性にも今回の講義で気づかされた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

上記の内容を、講義を聞いて理解したつもりでも、実践するとなると非常に難しい。まず「事実質問」を複数考えることそのものがなかなか上手いかず、どうしても NG ワードとされている” how” や” why” を使った質問しか思い浮かばないという事態になってしまった。また、事実質問をいくつか考え出し、自分が知りたい情報を聞きだせるよう質問を組み立てたが、この質問で本当に聞き出したいことが導き出せるのか、最初の関係づくりから自然な流れで質問できているのか、というところを客観的に判断することが特に難しい点だった。質問づくり、質問の構成、全体の見直しといった全てのポイントが自分の判断だけでは不安な点が多く、練習を重ねていかなければ質の良い対話型ファシリテーションにはならないと感じた。

また、私たちのグループで考えた質問を発表した後にコメントをいただいたが、「事実質問」でなければならぬはずが、質問そのものに自身の主観、考え方が入ってしまっているというご指摘を受けるまで、そのことに気づくことができなかった。事実だけを聞くようにするということがどれだけ注意を払わなければならないことなのか、実践してみないとわからないと痛感した。



写真：グループワークで作成した事実質問

(※左から右に進み、オレンジの付箋が質問、水色の付箋が質問に対する、グループで想定した答え)

国際協力や地域開発活動について考えたこと

私は、学部生の時に経験した、アメリカの貧困地域での食料供給インターンシップをきっかけに、国際協力に興味を持つようになった。国際協力について学ぶことはもちろん、国際協力業界に入る窓口を広げる目的で大学院に進学し、現在、経済的なアプローチをメインに国家の開発メカニズムを学び、個人ではアフリカの農村地域に焦点を当てて、農業生産性と社会的男女格差の関係について研究をしている。研究を進めていく中で、国際協力や地域開発活動というのは、援助する側が一方的に行うことではなく、援助を受ける側が主役となって成長していくのを手助けすることだと考えるようになった。そこには決して上下関係はなく、援助する側も受ける側も対等でなければならない。援助の政策内容といった高度な専門知識、テクニックはもちろん最重要だが、その前提となる相手との関係づくりに工夫を凝らしていかなければ、目標は達成できないだろう。

これから国際協力のキャリアを築くことを目指していく上で、専門的な知識、技術だけでなく、相手との関係づくりにも注意して学んでいくことが必要になると考える。

今後の学習や研究に向けた抱負

上記で述べたように、アフリカの農業生産とジェンダーを関連づけた研究をしており、実際に現地に赴いて村人にインタビュー調査を実施する予定でいる。そこで村人が直面している問題を聞き出すためにも、今回学ばせていただいた「事実質問」を使って、メタファシリテーションの技術を有効に使わせていただくためにも、調査までに練習を重ね、質の高いインタビューができるよう精進していきたいと思う。

三田寺 舞

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 理学専攻
博士前期課程 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今回の講義を受けて、開発途上国への支援は想像以上に難しいことを知った。講義を下さったのは、NPO法人のムラのミライの講師の方だったが、ムラのミライも1990年代は支援しては失敗、ということを繰り返していたそう。しかし、あるとき、一方的に支援するのではなく、ある規則に則った対話をすれば、途上国の方々の経験や知識を引き出しつつ、自立を促すことが可能だということに気が付いたそう。この対話法こそが、『対話型ファシリテーション』である。講義では、その対話法について教えていただいた。現実には、「感情」、「考え・認識」、「事実」の三つの要素で構成されているが、本音を引き出す

には、「感情」、「考え・認識」を問う質問ではなく、「事実」を問う質問をしなくてはならない。そのためには「なぜ(Why)?」や「どう(How)?」といった疑問詞は用いるのではなく、「何(What)?」「いつ(When)?」「どこ(Where)?」「誰(Who)?」といった具体的に答えられる疑問詞のみを使う。こういった事実質問を続けていくうちに、相手の回答に本音がみえ、同時に相手も何をすべきかに気付く、というものだった。この対話法を用いれば相手の本音を引き出せるということに、はじめは半信半疑であったが、実際に使ってみると、思い込みに関わらず相手の状況が正確に理解出来るということが分かった。この対話法は、途上国の方々と話すときだけではなく、日常生活でも有効に用いることの出来るものであった。こういった対話法を習ったのは初めてだったのでとても勉強になった。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

はじめに、事実質問だけを用いて一対一で対話をした。質問する側は、使ってはいけない疑問詞や副詞を考えながら話さなくてはいけないので、大変だったが、質問される側としては、事実質問だけに答えればいいので、非常に答えやすかった。そのうえ、相手が自分の話を一生懸命聞いて、次の質問を考えているのがわかり、より自分のことを話す気になった。事実質問をひたすらしていくこの対話法は、一方的に質問しているだけなので、一見尋問のように聞こえるが、実際は相手の本音を引き出すことが出来、会話が弾むことがわかった。次に、4,5 人のグループになって、途上国の方々と対話を想像した事実質問を考えた。自分の枠組みの中で次の質問を考えてしまうので、無意識のうちに誘導質問をしてしまうことが分かった。また、気を付けていても、いつもや普段などの副詞や、遠い・近い、高い・安いなどの副詞を用いて、感覚的な質問をしてしまった。先生も仰っていたように、この対話法を身に付けるには、訓練が必要だと思った。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

開発途上国の支援をするには、まずは物資や資金を提供することが重要だと考えていたが、それをしたところで、本当の意味での支援にはならないということを知った。こちらが一方的に支援をするのではなく、現地の方々が自ら課題解決にむけて行動を起こしたときに根本的な解決へと向かう。必要なのは意識改革を促すためのサポートをすることであり、安易に物資や資金を調達したり、提案や指示をしたりすることではない。今回の講義を聞いて、国際協力や地域開発活動について、より多面的に考えられるようになった。今回教わったことを活かして、本当の意味で開発途上国のサポートが出来るようになりたい。

光橋 翠

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 保育・児童学領域

博士後期課程 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

私は学部時代に開発学を学び、その後も自分自身の NPO の活動を通して、わずかながらの機会でしたが、途上国の人々が抱える問題を目の当たりにしてきました。一方で、どのようにそのような人々と協働でプロジェクトなどに発展させるかのノウハウは学んだことはなく、そのためより深い交流には踏み出せずにいました。その意味で、このたびのワークショップはとても貴重な機会となりました。

このワークショップを通して学んだことは主に3点ありました。一つ目は、途上国の人々と対等な立場に立つためには、途上国の人々から学ぶという姿勢をもつということでした。例えば、途上国の人々との初対面の時に、訪問先のお宅などで目に付いたもので興味を引いたものについて、「これは何ですか？」と相手に聞くことなどです。そうすることで彼らが自分の情報が相手にとって価値があると感じられることを知りました。実際に私たち自身も、そのような質問をすることで、多くの学びがあるのではないかと思います。

二つ目は、今回の講座の中心議題でもある、NPO「ムラのミライ」のスタッフの皆様が長年の経験から編み出した手法「事実質問」でした。途上国の人々に、事実のみを聞いてゆくことで、本音を引き出してゆくという手法です。正直なところ、人々の認識ではなく事実のみを頼りに質問してゆくことに驚きを覚えました。しかし、認識や感情を交えず話を進めることで、問題そのものに焦点を当てて議論ができるという意味で有効ではないかと感じました。

三つ目は、途上国の人々の「オーナーシップ」を大切にすることです。例えば、教育は大切だと外部者が農村の子どもたちを学校に行かせようとしても、彼ら自身が本当に教育を重要だと感じていないのであれば、あるいは彼らが実際に必要だと感じられる学校の在り方が実現しなければ、それはプロジェクトとしては継続しないということです。当事者が必要を実感できること、自分で意思決定できるからこそ、オーナーシップの感覚が生まれるのだということが分かりました。そのためにも、ファシリテーターとしての外部者は黒子に徹せねばならないことが分かりました。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

実際に、事実質問をグループワークで実践したところ、とても難しいことに気付きました。事実だけで相手に迫ろうとしても、なかなか本音に行きつくことはできませんでした。また、問題解決も、事実質問だけだと途中で会話が途切れてしまい、難しさを感じました。ワークショップの参加者同士でやってみることで感覚はつかめましたが、やはり今回紹介

された手法は現場での実地経験を重ねるよりほかないと思いました。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

このたび、NPO「ムラのミライ」の前川先生より、大変貴重なご講演をいただきました。今回教わったファシリテーションスキルは、「ムラのミライ」のスタッフの皆様が長年の試行錯誤で生み出されたことを知りました。「介入しない介入者」となることは、相手を「信頼しきる」ことであり、つまりこちらが結論をもつことなく、聞き手に徹するということです。そうすることで、途上国の人々がオーナーシップ意識をもち、プロジェクトの継続につながるのだと分かりました。

いま「持続可能な開発目標（SDGs）」について議論されていますが、このような手法が活かされなければ、結果的にプロジェクトは継続せず、そもそも人々の福祉に貢献するものにはならないと思いました。

今後の学習や研究に向けた抱負

私自身は、保育・児童学領域において研究活動を行っています。特に幼児期のサステナビリティ教育について研究していますが、今回学んだ内容は研究にも活かせると思っています。途上国の人々と「子ども」は、一見関係のないように思えるかもしれませんが、ある共通点があります。それは、双方とも社会の中で声が反映されにくい立場にあるということです。途上国の人々と対になるのは先進国の人々であり、子どもの対になるものが大人となるわけですが、本当の意味で対等の立場が実現してきたと言えるでしょうか。途上国の人々も子どもも、社会を持続可能な方向に向けてかじ取りをする重要な主体です。そのため、この非対称性を解消しない限り、SDGsは達成できないと感じています。今回学んだ、相手と対等な立場に立つスキルを、私自身の研究活動にも活かしてゆきたいと思っています。また、自分自身の環境教育のNPOの活動の一環として、途上国で研修を行う機会もあるので、今回の学びを活かしていきたいと思っています。

このたびは、このような学びの機会をいただきまして、前川先生、またグローバル協力センターの先生方に深く感謝を申し上げます。

山内 望美

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 人間発達科学専攻

博士前期課程 2年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

講義を振り返って、即座に頭に浮かぶのは、会話の中で、事実、ホンネを引き出すための質問の仕方についてである。今回の講義は、途上国の人々との話し方をテーマに行われたが、決して途上国に限った話ではなく、普段の対話においても、応用できる汎用性の高いものだと感じた。「なぜ」「どう」という二つの疑問詞は、相手の事実やホンネを引き出すためには、使うべきではない、ということを知り、頭では理解できていた。しかし、いざ実戦で他人を相手に、知りたいことを質問する際、上記の二つの疑問詞を使えないことに、非常に不便さを感じた。質問する側にとっては、最も楽な聞き方がこの二つの疑問詞に当てはまるだろう。しかし、答える側にとっては、自分の考えや認識を述べる必要があり、「いつ」「誰」のように、事実を述べるだけの質問よりも、格段に答えに時間を要することがよく分かった。

私は、心理学専攻であり、これまで臨床心理士とクライアントとの関係性、会話の仕方について、学んだ経験がある。その際も、今回の講義と同じように「なぜ」「どう」質問は避けるように言われた。その理由までは、実際にクライアント側になっていないため、実感として理解していなかったが、今回の実践型の講義のおかげで、身をもって理解することができた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

グループワーク（一つのお題を決めて、それを聞き出す為に、三十個の事実質問をする）を行って、一番に感じたのは、特定の事実を聞くのに、こんなに時間がかかるのか、ということだった。「どう思うか」「近いと感じるか」などの質問は、人によって感じ方は異なるため、事実質問ではない。となると、過去の出来事について、ひたすら質問を連ねていくのだが、質問と質問の関連性がなくなってしまう、話の方向性がずれてしまい、思い描いていたストーリーは完成させられなかった。これを、自然な流れで、素早く目的の事実を引き出せ



(写真) グループワークで行った 30 個の事実質問

ようになるためには、友人、家族、あらゆる人との会話においても、意識しながら、事実質問を心がけることが求められていると考える（この文章を打ちながらも、「普段」や「毎日」という曖昧な副詞を使いそうになる時点で、まだまだ訓練が必要と思われる）。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

これまで長年、国際協力について興味を抱いてきたのだが、マクロの視点でしか、考えていなかったことに気づかされた。国際協力とは、「現地の人たちが、自律的に国創りができるように、その足がかりをサポートすること」だと考えていた。つまり、道路をはじめとしたインフラ整備が整っていないのであれば、そのサポートを行い、教育の質を上げるのであれば、施策の改定や、学校設備の充実が重要であると。しかし、ムラのミライさんが収入向上や、識字教室に取り組んでも、失敗したお話を伺い、国際協力は、もっとミクロの視点で、支援する側とされる側の関係構築や、会話が第一に重要であることを実感した。これは、自分にとって、大きな気付きとなった。

今後の学習や研究に向けた抱負

研究の中で、アンケート調査やヒアリング調査を行うことがあるため、その際に調査協力者のホンネを引き出すために、まずは対等な関係の構築からはじめ、事実質問に徹底することを心がけようと考えた。また、今後、研究や仕事の中で、開発途上国の人たちと関わる機会があったら、まず今回の講義で学んだことを思い出して、活用していきたいと思う。

山本 萌

奈良女子大学 文学部 人間科学科 2年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

「はがれた絆創膏を何度も貼り直しているだけでは意味がない」という言葉が印象に残った。この言葉は、インドのスラム街で生活している学校教育からドロップアウトした子どもを、正規の学校に入学させるために活動されている中での失敗から生まれた言葉である。この活動では、子どもたちを正規の学校に再び通わせるために、学校に通っていなかった間の勉強を補習という形で教えていた。しかし、しばらくすると突然補習に来なくなる子どもが何人も発生する。その理由は決して子どもたちが怠けていたわけではなく、日雇い労働をしている親の都合で住む場所が変わったからであった。親はその土地での日雇い労働が終わり、仕事がなくなると、また5日から10日間の短期の日雇い労働の職場所

へと子ども達を連れて、州をまたいで移住するのである。子どもたちを学校に通わせるためには、ドロップアウトした子どもに補習を行うという「怪我をしたところに絆創膏を貼るような応急処置」ではなく、親の労働環境を改善する必要があると気付いたというエピソードであった。また、この経験から、「魚をあげるのではなく、魚の捕り方を教え、村の人たちの自立を助ける」という「ムラのミライ」の活動指針が誕生し、それは次第に強固なものになっていった。この話から、子どもが学校からドロップアウトしてしまうという教育問題について、それを独立した一つの問題として一定方向から捉えるのではなく、親の労働環境など別の複雑な問題と絡み合っていることを理解し、多角的な視点を持って問題解決に望む必要があるということを読んだ。

しかし、活動指針が固まったムラのミライは成功というわけにはいかなかった。文字が読めないために薬と農薬を読み間違えて飲んでしまうといった健康被害や、言い包められて書類に判子を押すと借金を背負わされる書類だったといった被害を未然に防ぐために識字教育に力を入れたのだが、一体いつになったら文字が読めるようになったといえるのか、文字が読めるようになったのかどうか判断するための基準がどこにあるのか、そもそも文字が読めるようになったら問題は解決するものなのかという疑問が残った。また支援している村からの要請で、井戸を掘った際には、安全な飲み物が欲しいと言っていた言葉とは裏腹に、井戸のメンテナンスを怠り、井戸は壊れてしまった。同じく地球温暖化により環境保全が話題になった年には、裏山にマンゴーやカシューナッツなど実のなる木を植えたのだが、村の人は全部枯らしてしまった。収入向上のために産まれた子どもは販売しているという約束でヤギの雄と雌をセットで渡した際には、一日2食食べるのが精一杯の村だったため、我慢が出来ずヤギを食べてしまった人もいた。ヤギの子どもを販売できるほどに育てた人も、思ったより高値で売れなかったなどという理由から、決して満足な結果とは言えなかった。ここでムラのミライは、自立という言葉の意味についてもう一度考え直すことになる。そしてこの講義の胆である「対話型ファシリテーション」が生まれるのである。ファシリテーションとは、一般的には司会・進行という意味で使われるが、今回の講義で使われる「対話型ファシリテーション」では問題を抱えている人・変えていかなければならないと思っている人が自分たちで現状を理解し、考えて、解決策を見つけ出すことを支援する人というこの意味を持つ。あくまでも支援する人という立ち位置を守り、どうすればその問題を解決できるのか自分で考えさせるということが重要なのである。ここから自立という言葉の本当の意味を理解することができた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

メタファシリテーションでは、いくつかの重要な決まりごとがあり、その中の一つが事実質問をするということである。事実とは既にその人が行ったことという意味を持ち、事実質問とはその人・その村が過去に行ったこと、体験・経験したことについて質問すると

いう意味である。その理由は、未来のことはわからないため、おしゃべりにはならないよう事実だけを見るべきであるという考えからである。そして質問した回答に対して、また事実質問をすることが大切なのである。事実質問をする際に気を付けなければならないことに、「感情」「考え・認識」「事実」の違いである。講義の中で解説に使われた例では、「あなたは、朝ごはんは何を食べるのが好きですか?」「普段朝ごはんは何を食べていますか?」「今朝何を食べましたか?」という三つの質問である。これらの質問は順に「感情」「考え・認識」「事実」について尋ねたものである。「考え・認識」と「事実」は異なっているということを理解し、事実質問に望まなければいけないということである。

また、メタファシリテーションで、事実を知り、本音を引き出すために、使っても良い疑問詞と使ってはいけない疑問詞がある。使っても良い疑問詞は、「何」「いつ」「どこ」「誰」といったもので、逆に使ってはいけない疑問詞には「なぜ」「どう」がある。グループワークで実際に事実質問を行ったのだが、予想以上に難しく、質問に詰まってしまう機会も多かったように見受けられる。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

今まで国際協力という言葉を聞くと、私たちが助けるのだ、私たちが助けてあげないといけないという意識が強かったのですが、今回の講義を通して、私たち支援する側が問題を見つけて解決するのではなく、その地域で生活している人々が自分たち自身で問題を理解し、考えて、解決策を見つけ出させることが何よりも大切だということを学んだ。

渡部 恭子

お茶の水女子大学 文教育学部 芸術表現行動学科 1年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

私にとって、最も印象深かったのは、現実が「事実・認識・感情」この3つで構成されているという話だ。「朝ごはんは何を食べるのが好きですか?」「朝ごはんは普段何を食べますか?」「朝ごはんは今朝何を食べましたか?」実際に、これらの質問を受けていた方の答えは見事に異なっていた。今までは「現実＝事実」だと私は考えていたが、言葉の使い方1つで、こうまで変わってしまうのかという驚きだった。「好きと実際は違うこと」や「普段という言葉の曖昧さ」、「事実を答える容易さ」が身にしみてわかった。どういう言葉を選ぶのか日本語でさえも鈍感であるのに、非母語の言葉となると、どう伝え、どう聞くと最善で効果的かを、現地調査に行く前に単語単位で考えておく必要性を感じた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

私は午前中のみ参加だったため、できるだけ事実を引き出すような質問を二人でし合う、というペアワークを行った。私は普段「なぜ」と聞くのが比較的好きだ。自分とは異なる概念がある場合、新たな発見につながるからだ。「なぜ」という曖昧さを残した表現によって、相手の答える幅を広げたり、自分が知らない捉え方を発見できたりするからだ。だが、今回の講義では「なぜ」や「どう」はその曖昧さのため、できるだけ使わない方がいいとのことだった。確かに、実際に質問しあってみて、私が答える側に回ったとき、「なぜ・どう」よりも「何・いつ」と聞かれた時の方が答えやすく、不安にならなかった。相手、特に親しくない相手、を不安にさせないような質問、反対にもっと余談をしたいと思えるような質問に、この意識を持つという概念を初めて知ることができた。また、もうひとつこのペアワークを通して感じたことがある。質問だけでなく、自分の話も織り交ぜると相手も面白く感じるのではないかということだ。質問する側だけでなく、時間を割いてくれている相手にも、感謝の気持ちを込めて、何か気づきのあるインタビューは双方に利益的だ。そのためには、自分のことについても知っておくといいのではないかと考えている。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

今回、さまざまな国際協力における失敗談を聞くことができた。やりっぱなし、現地の需要との不一致などが理由としてあげられていた。どうすれば国際協力が無駄とならず、目的である「協力」や「開発」に結びつくのかを考えるためにも、現地調査は不可欠であると感じた。さらに現地調査で、本音を聞き出すことも不可欠である。

渡部 文香

奈良女子大学 文学部 人間科学科 2年

講義を通じて学んだこと・印象に残ったこと

今までは、現場に行けば課題はおのずと見えてきて支援者がアドバイスをしたり物資を与えたりすることで途上国の発展につながるのだろうと勝手に思い込んでいた。しかし今回の講義で、村の人たちの自立を促しこれから先も改善された生活水準を維持できるようにならなければ何の意味もないということに気づかされた。大切なのは村の人たちが自分たち自身で本当の課題に気づき、その解決に向けて自分たち自身で取り組みを進めることだということがお話の中で出てきた実際の事例（村人が自ら水の枯渇の問題に気づいたことなど）を聞きながらとても納得できた。そのうえで「対話型ファシリテーション」がど

のように役に立つのか講義の前には分からなかったが、相手と対等な関係を保ち、質問する側やされる側の主観が入らないように事実だけを聞き出して本当の課題に結びつけていくことがとても合理的なプロセスだと講義を聴いて思った。課題解決のために失敗を重ねながら、NPO 法人「ムラのミライ」が行きついた国際協力のよりよいアプローチに触れることができ大変貴重だったと思う。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

実践に近い形で行われたグループワークや討論で具体的な質問を考えると、頭では気を付けるポイントを押さえているはずなのに、主観に偏った質問や曖昧な質問、あるいは相手に新たな主観を生ませてしまう質問などをついついしてしまう傾向があった。私たちの日常会話ではそのような質問をしたとしてもあまり支障は出ない。お互いが同じ環境の中で生活しているため、課題が一体何なのかを共有することは容易であるし、そもそもただの世間話では気にする必要などない。しかし、そのような質問を自分の生活圏とは別の場所ですて課題解決につなげるのは難しい。そのような事実を、説明を聞いて理解したはずだったが、本音や事実を聞き出そうとする際に日常生活で身についた癖で「なぜ」という言葉で曖昧に聞いてしまったり、自分で推測した、聞いてもいない事柄を組み込んだ質問をしてしまったりと何度か失敗してしまった。今回のグループワークでさえ戸惑うことが多かったのだから、実際に現地で「対話型ファシリテーション」を行う際には、質問に困り解決に導くことが極めて困難になるだろう。しかし「ムラのミライ」は「対話型ファシリテーション」によって多くの成功を収めている。私も事実を聞き出すことを意識しながら、「対話型ファシリテーション」の技術を身につけていきたいと強く思った。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

恥ずかしながら、今まで国際協力に対しては発展している国が発展途上の国に物資や技術を与えて一方的に援助するというイメージを持っていた。これは「発展」や「開発」の意味を狭い意味でしかとらえていなかったことによる誤った考え方であると思う。確かに一方的な援助は一時的には村の生活水準を高めることができるだろう。しかし、村を存続させていくのは私たちではなくそこに住んでいる村人たちである。村人たちが行動を起こさない限り状況は改善しない。だからこそ私たちが指示したことをさせるという上下関係を作るのではなく、対等な関係を保ちながらあくまでこちらは地域開発のきっかけになれば良いのである。自立を促すことができれば将来も水準の高い生活を送ることができる。こうして初めて国際協力や地域開発活動が有意義なものになるだろう。

今後の学習や研究に向けた抱負

私は途上国へ行くことは今のところ考えていないため国際協力場で「対話型ファシリ

テーション」を使用する機会があるか分からないが、別の分野でもこの方法は役に立つと思う。私は心理学を専攻しているため、アンケートなどで人間の本音を聞き出したり問題解決につなげたりする際の質問に積極的に取り入れていけたらと思っている。

3. 講師報告書

研修報告書

1. 研修対象： お茶の水女子大学グローバル協力センター大学間連携イベント
 2. 研修項目： 『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方
 3. 研修期間： 2018年6月16日（土）10：00～17：00
 4. 研修講師： 前川 香子
 5. 研修開催場所：お茶の水女子大学大学本館 135 室
-

研修概要（実施方法等）

【午前】

1. 自己紹介および当会の過去の活動紹介（主に失敗例）
2. メタファシリテーションの基本的な考え方について
3. メタファシリテーションの基礎となる事実質問について
4. 事実質問練習：ペアでの練習「相手のことを知る」

【午後】

5. 事実質問練習：グループワーク（テーマを設定し、提示された写真を使って質問を組み立てる）
6. 当会のメタファシリテーションを用いたプロジェクトの紹介
7. 事実質問練習：3人一組での練習「改めたい習慣の解決策に気づいてもらう」

参加学生たちの関心ごと（環境教育、女子教育など）にも触れつつ、途上国でのコミュニケーションのありがちな事例を基に、メタファシリテーションの考え方やその基本となる事実質問の使い方を身に付けられることを目的に内容を組み立てた。

また、一方的な講義にならないよう、学生たちの経験を聞き出したり実践してもらったりしながら、自由に発言できる環境づくりに気を付けた。さらに、大学間の交流も目的であることから、他大学の学生を各グループに一人ずつ配置したグループ分けを行い、ワーク中にお互いの経験や考えを共有し合う時間になるように留意した。

・所感

事前にアンケート回答を頂いていたことから、参加学生たちがこれまでに得ている知見や関心ごとが事前に分かり、参加学生に沿った内容を組み立てるのに大いに役立った。

また、昨年同様、学部生から院生まで幅広い学生層だったため、実践練習や質疑応答の内容を通して、フィールドで遭遇する事例などについても、お互いに学びあうことができたのではないと思われる。

昨年よりも、途上国での現場をより意識したワークを実施してみたが、フィールド調査を未経験な学生にも、事実質問の組み立て方のコツがより分かりやすくなるよう、もう少し工夫が必要だと感じた。

4. 資 料

(1) 参加者アンケート集計結果

イベント終了後、参加学生を対象にイベント参加経緯と満足度等についてアンケートを配布し集計を行った。

全学共通科目「国際共生社会論実習」の履修者には本イベントの参加が推奨されていたため、「本イベントを知った経緯」として、指導教員やその他（国際共生社会論実習の授業の一環として参加）、またポスター/チラシ等の掲示が多かった。

「内容全般」については回答者 17 人中 13 人が満足、4 人がやや満足と回答しており、満足度の高いイベントであったと言える。

「開催時期と期間」については 15 人が満足、1 人がやや満足との回答があり、参加しやすい開催時期であったと言える。

「テーマの選択」については、16 人が満足、1 人がやや満足、「内容のわかり易さ」については、12 人が満足、5 人がやや満足となっている。参加者は、途上国で国際協力にかかる活動に携わった経験を持つ大学院生や、これからフィールド調査を予定している学生で、イベントを通じインタビューの手法を学ぶことを期待しての参加だったが、事実質問の練習を通じ、「自分から提案をせず、当事者に気づいてもらえるようにすることを徹底することの重要性を感じた。また、自分の視点で物事を判断していることを改めて感じた。」などの気づきが特に役立つと考えている。「対話型ファシリテーションは予想以上に難しかった。前川さんのお話を聞いていると単なるリズムカルな会話のように聞こえたが、実践してみると、質問がなかなか出てこなかった。相手に教えるのではなく、気付かせることが大切だということが印象的だった。」「国際協力だけでなく、日常生活の課題解決についても幅広く応用できる内容になったので活かそうと思った。」「実際にネパールを訪問するにあたって、どのような質問をして良いのか良く分からなかったのでとてもためになった。」などのコメントがあり、多くの参加者が今後の活動に活かせると考えていると言える。

本イベントを何で知りましたか（複数回答）	計
ポスター／チラシ等の掲示	6
大学ホームページ、Facebook、Twitter、Ochamail	4
「共に生きる」スタディグループのメーリングリスト	2
指導教員の紹介	7
その他（大学の友人）	4

本イベントの感想（時期と期間）	計
満足／適当	16
やや満足／適当	1
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

本イベントの感想（会場）	計
満足／適当	15
やや満足／適当	2
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

本イベントの感想（テーマの選択）	計
満足／適当	16
やや満足／適当	1
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

本イベントの感想（内容のわかり易さ）	計
満足／適当	12
やや満足／適当	5
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

本イベントの感想（内容全般について）	計
満足／適当	13
やや満足／適当	4
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

その他（感想）
メタファシリテーションの定義、やり方を教えて貰っただけでなく、実際に体験することでその難しさを実感できた。メタファシリテーションの核となる事実質問において、そのコンセプトと手法が特に役立った。

事実質問は難しかったが、ワークショップなどで楽しくできた。事実を知ること、効果のある援助が出来ること。また事実質問を实践したことで良く分かった。普通の話と普通の調査方法との違いについて、もう少し説明が欲しかった。
ものすごく刺激的で楽しかった。以前からムラのミライの活動に興味を持っていたので、よい機会だった。「なぜ」、は使わないという点が特に役立った。
実践してみると、想像以上に大変で難しいなと思った。しかし、とても面白く持続的な活動において有益だと感じた。時期などを限定し、回答者が答えやすく、正確な回答をもらうという点が特に役立った。
対話型ファシリテーションは予想以上に難しかった。前川さんのお話を聞いていると単なるリズミカルな会話のように聞こえたが、実践してみると、質問がなかなか出てきなかった。相手に教えるのではなく、気付かせることが大切だということが印象的だった。自分に悩みやもやもやとしてことがあった時に解決を見出せる方法にもなるなと思った。
「なんで」「どうして」を使わずに質問をしていくことは簡単に見えて、実践してみると難しかった。相手に指摘や提案をさせずに相手自身に問題点を気付かせるというのは聞く側の思考力が必要だと感じた。グループワークが特に役立った。
国際協力だけでなく、日常生活の課題解決についても幅広く応用できる内容になったので活かそうと思った。あまり途上国の実態について知らなかったなので、ご自身の経験談を沢山聞かせて頂け、理解が深まった。
今まで漠然としてしか当事者主体の活動に関してのイメージが持てていなかったもので、具体的な方法を知ることができてとても刺激になった。自分から提案をせず、当事者に気づいて貰えるようにすることを徹底することの重要性を感じた。また、自分の視点で物事を判断していることを改めて感じた。
前川さんの話し方がとても分かり易く、スッと入ってくる講座でした。日常生活でも使えそうなことで、これからもっと練習していきたい。「相手に気づいて貰う」という考え方が新鮮だった。One way なインタビューにしないよう心掛けたい。
日常生活でいつでも使える方法であるメタコミュニケーションが学べてよかった。相手の本当のことが知れるのがすごいと思った。事実質問でポジティブな経験を思い出させて自尊心を持たせたり、話をしてくれるためのエンジンをかけさせるという考え方が面白かった。メタコミュニケーションを行う際の弊害について知りたかった。
今まで意識していなかったようなことに気づくことが出来た。途上国だけではなく、日々の生活にも役立ちそうだなと思った。NGワードがあること、その理由。身近なことから聞いていくということが特に役立った。
実際にネパールを訪問するにあたって、どのような質問をして良いのか良く分からな

ったのでとてもためになった。ネパールで実際に役立てたい。使ってはいけない副詞や疑問詞を具体的に教えてもらい良かった。
途上国の人との対話のみでなく、実生活においても活用できる内容だったので良かった。「なぜ」「どう」という疑問詞を使わなくても相手の事実やホンネを聞き出せることが特に役立った。
途上国だけではなく、日常生活にも落とし込める内容で分かり易く解説いただけ、ためになった。具体的な話や、他大学の人と話ができて良かった。
あまり国際協力についての知識がなく、対話型ファシリテーションそのものに興味があり参加した。本音を聞き出したり、相手の気持ちによりそったりと日常でも使える方法なので積極的に使いたい。対話において本音を聞き出すために、使ってよい聞き方と望ましくない聞き方があること。具体例も示され分かり易かった。

(2) 写真



講師の前川香子氏



ペアで「事実質問」の実践練習



写真を元にグループワーク (1)



写真を元にグループワーク (2)



グループ発表の様子 (1)



グループ発表の様子 (2)

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

大学間連携イベント「『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方」
実施報告書

2018 年 10 月

お茶の水女子大学グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel&Fax: 03-5978-5546

Email: info-cwed@cc.ocha.ac.jp

